



富田川河床遺跡

発掘調査報告

377

文 育 委 員 會
富田川河床遺跡調査團

例　　言

1. 本書は広瀬町教育委員会が国庫と県費の補助を受けて昭和49年度から昭和51年までの3年間にわたり実施した富田川河床遺跡の緊急発掘調査のまとめである。
2. この調査とは別に広瀬町では昭和51年、新宮橋地点の発掘調査を実施したが、参考資料としてその成果の一部を本書に収録した。
3. この3年間の調査団の構成は次のとおりである。
 - ・团长 山本 清（県文化財保護審議会委員、島大名誉教授）
 - ・遺構調査班 内田 才・野津弘雄・島田篤紀（島根県埋蔵文化財調査員）、蓮岡法暉（県教育委員会文化課埋蔵文化財係長）、勝部 昭・前島己基・宮沢明久・川原和人（県教育委員会文化課主事）、ト部吉博（県教育委員会文化課嘱託）
 - ・資料調査班 小島清兵衛（県文化財保護審議会委員・漆器担当）、熊野栄助（県文化財保護審議会委員・鉢塗担当）、住田 勇（日立金属和銅記念館々長・冶金鍛冶担当）、村上 勇（県立博物館学芸員・陶磁器担当）、藤原久良（町文化財専門委員・陶磁器担当）、妹尾豊三郎（町文化財専門委員・文獻担当）
 - ・調査補助員 [（ ）内はいずれも当時]
 - 昭和49年度 千家和比古・松本岩雄（国学院大学々生）津金沢吉茂・三宅博士（立正大学々生）・内田律雄（日本大学々生）・熱田一男（岡山大学々生）
 - 昭和50年度 勝部智・若原健一・大西雅男・大石昌利（奈良大学々生）
 - 昭和51年度 勝部智・若原建一・大西雅男・前川知信・山田恵子・加藤裕之・田中三成（奈良大学々生）
4. 発掘調査は、昭和49年度については前島が担当し、昭和50年度は主にト部があたり、蓮岡・村上・宮沢が参加した。また昭和51年度は主に川原・ト部があたり、蓮岡・村上が参加した。
5. 奈良国立文化財研究所、町田章・宮沢智士の両氏からは有益な指導と助言をいただいた。
6. 金属分析は日立金属安来工場和銅記念館にお世話になった。また、本書収録の分析結果は前年度概報に所載したものを再録した。
7. 遺物の整理、実測は村上・川原・ト部の他秀坂真樹（島根大学々生）がこれにあたった。実測図等の処理は、主に川原があたり、ト部・西尾克己（島根大学卒業生）がこれをたすけた。
8. 写真は蓮岡・村上・ト部の撮影にかかるものである。
9. 本書の編集は蓮岡・村上・川原・ト部が協議して行った。
10. 遺物の整理に関しては、島根県立博物館の協力を得た。
11. 調査の実施にあたっては、そのほか関係諸方面及び町民の皆様から多大の協力を得た。証して謝意を表する。

目 次

はじめに	1
I 調査の経過	2
II 地理的環境と歴史的経緯	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的経緯	4
3. 遺跡の鳥瞰	5
(1) 富川城下町絵図について	6
(2) 『寛永三年富田庄内広瀬村御検地帳』(三方及び畠方)について	6
(3) 『寛文八年広瀬町戸敷帳』について	7
III 調査の概要	11
1. 調査の概要	11
2. 検出遺構	13
(1) 建物跡	13
(2) 井戸跡	17
(3) 工房跡状遺構	19
(4) 道路跡	20
(5) 木橋	21
(6) 杭列	21
(7) 土塙	22
(8) その他の遺構	22
(9) 層位関係	23
3. 小結	24
IV 出土遺物	26
1. 陶磁器	26
2. 漆器・木製品	32
3. 金属製品	33
4. 石製品	34
5. 小結	35
V 金属滓と羽口	37
VI 結 語	39

挿図 1	富田川河床遺跡の位置
タ 2	「月山城図」
タ 3	調査区の地形と発掘区画
タ 4	S B 006実測図
タ 5	S B 012実測図
タ 6	S E 010実測図
タ 7	S E 015実測図
タ 8	S X 004実測図
タ 9	S S 003断面図
タ 10	51年度調査区①・新宮橋地点②断面図

P L 1	50年度調査区全景、51年度調査区全景	第Ⅰ図	調査区全体図（おり込み）
タ 2	建物跡 S B 006・S B 012	第Ⅱ図	49年度調査区全体図（おり込）
タ 3	井戸跡 S E 010・S E 014	第Ⅲ図	50年度調査区全体図（おり込）
タ 4	井戸跡 S E 015底部外側・S E 015底部内側	第Ⅳ図	51年度調査区全体図（おり込）
タ 5	工房跡状遺構 S X 001・S X 005	第Ⅴ図	新宮橋地点 P 2 グリッド下層 実測図
タ 6	道路跡 S S 003・池状遺構 S X 022		
タ 7	出土遺物(1)	第Ⅵ図	出土遺物実測図(1)
タ 8	出土遺物(2)	第Ⅶ図	タ (2)
タ 9	出土遺物(3)	第Ⅷ図	タ (3)
タ 10	出土遺物(4)	第Ⅸ図	タ (4)
タ 11	出土遺物(5)	第Ⅹ図	タ (5)
タ 12	出土遺物(6)	第Ⅺ図	タ (6)
タ 13	出土遺物(7)	第Ⅻ図	タ (7)
タ 14	出土遺物(8)	第Ⅼ図	タ (8)
タ 15	出土遺物(9)		

はじめに

広瀬町は、遠く中世富田城によってその発展の礎が築かれました。富田城跡は国指定の大切な史跡であり、広瀬町の宝です。

富田川河床遺跡は、その富田城の城下町の遺跡の一部であり、江戸時代のはじめ寛文6年の大洪水で川違いした富田川、現在の飯梨川の川砂の下深くうもれていたものです。

この広瀬の先人たちの家並みは、昭和10年代のはじめから川床に姿をみせはじめましたが、私たちはその歴史的学術的価値の大きさに驚き、この保護について種々協議を重ねた結果、国及び県の補助を受けて昭和49年度から今年昭和51年度まで3年間発掘調査をおこないました。

この報告書は、第3年次の昭和51年度の調査の成果を含んだ、この3年間の調査の総括的報告です。

この3年間の調査によって、私たちは歴史の重い歴史車をひたすらまわしつづけた先人たちの生活をあとづけることができました。この事実を明らかにし、記録することは私たちの義務だと考えます。

このような意味で、この報告書が富田城下町の遺跡の理解をとおして、文化財に対する一般の理解と愛護の気持を高めることができると願うものです。

最後に、この調査に対し長期にわたりご指導いただいた奈良国立文化財研究所、県当局など関係諸方面、ご協力をいただいた町民の方々に対し衷心より感謝申しあげます。

昭和52年3月

広瀬町教育委員会教育長

小 藤 武 雄

I 調査の経過

島根県能義郡広瀬町富田川河床遺跡は、国指定史跡富田城跡の立地する月山の西麓を大きう回して流れる飯梨川の川床に所在するもので、現在確認されているところでは富田橋から下流約1.5 kmにわたって存在するものである。

多くが江戸中期以降の製作にかかるとされる富田城下を描く絵図には、いずれも現在の飯梨川の流域を含む富田城跡の南西、西、北西にあたると推定される部分に城下の町並みが描かれていて、この地域の地下にかけての城下町が埋っていることは予想されていた。

その「幻の城下町」が飯梨川の川床に隠れることになったきっかけは、昭和35年富田橋の下流80 mの地点に砂防用の堰堤が建築され、それと前後して上流で布部ダムの建設が、下流で採砂がおこなわれ、下流へ流れる砂が減少したことによる。これら一連の工事によって富田橋下流の川床をおおっていた砂が大量に流出し、砂層は次第にうすくなり、流路内に石列などが露出しはじめたのである。この現象は昭和10年以降顕著になり、郷土史家の注意するところとなって、おびただしい陶磁器類が採集され、昭和41年には新聞に報道された。さらに昭和42年には新宮橋下流200~300 mの地点で遺構の存在が認められ、昭和45年には新宮橋の上手及び下手の川原で、石列、杭などが確認されるにいたった。

こうしたことから昭和42年と45年に山本清（当時県文化財専門委員）が現地を踏査し、遺跡の概要を報告するとともに、その重要性と調査の緊急性を説いた。

ところが、その後昭和48年夏の異常旱ばつで飯梨川の流水が減少し、新宮橋下流約500 mの川床に広範囲にわたり建物跡、石組の井戸跡などが露呈したので、広瀬町教育委員会ではとりあえず露出した遺跡についての緊急調査を実施し、写真撮影と実測等による記録保存をおこなった。

しかし遺構が飯梨川の川床にあり、堆砂による遺構面の保護がなくなり川床は流水によって年々侵食されて、このまま放置しておけば早晚遺跡は崩壊、消失してしまうことは確実であると判断されたので、県教育委員会と協議の結果広瀬町では国及び県の補助を受け昭和49年度から51年度まで3年継続で緊急調査を実施したのである。

調査は、発掘調査を担当する遺構調査班と陶磁器類、漆器その他の木製品、金属関係遺物、文献資料の調査及び遺構の建築学的考察を担当する資料調査班の2班で調査團を組織し、打ち合せ会をもち、相互に意見を交換しながら調査を進めた。また調査の結果については中間あるいは終了後報告会を開き、一般の理解と協力を得るように努めた。

発掘調査の範囲は、新宮橋下流の左岸川原の500 mから250 mで、3年間継続して下流から上流へ調査を進めた。

なお、そのほか初年度49年度は発掘調査と平行して富田河床を含む富田城跡一帯の航空測量による1000分の1の地形測量図の作製をおこない、また最終年度51年度には新宮橋地点において300 mの部分的発掘調査をおこなった。

(蓮岡法障)

II 地理的環境と歴史的経緯

1 地理的環境

前述したごとく、広瀬富田川河床遺跡は、国指定史跡富田城跡の位置する月山の西麓を流れる飯梨川の川床に所在する。

飯梨川は、その古名を富田川といい、源を広瀬町の奥部に発し、安来平野をほぼ北方に貫流して中海に注ぐ総延長39.9kmの能義郡最大の河川である。その流路は、過去幾度かの氾濫で、主要なもので5回にわたり河道が変遷している。

(註1)

飯梨川の上流域は花崗岩類の地質で、風化が進行しており、せい弱で雨水、流水により崩壊しやすい土質である。またこの地域は良質の真砂砂鉄を産し、古くより流水

による「鉄穴流し」がおこなわれ、盛んに山が切り崩されて、大量の砂が川に流されてきた。

これらのことがあいまって、飯梨川は下流域に砂質の安来平野を形成したが反面堆砂により川床が上昇して、県下有数の天井川となった。

このため過去幾度か大洪水を引きおこし、流域に甚大な被害をもたらした。江戸時代だけで記録に残っている大きなものだけでも寛永12年(1635年)をはじめとして寛文6年(1666年)、延宝2年(1674年)、元禄11年(1698年)、同15年(1702年)、同16年(1703年)、享保6年(1721年)、同14年(1729年)、宝暦11年(1761年)、明和5年(1768年)、文政9年(1826年)と11回におよぶ。

伝えによると、その中で富田川河床遺跡に直接関係するのは寛文6年(1666年)の洪水であるといわれる。

(註2)

能義郡伯太町西村家の記録によると

(註3)

寛文六丙午八月四日ノ晩ヨリ大雨大水出田畑捨り母里富田不残流レ富田母里町共替ル人多
ク死ス

とあり、富田八幡宮附近の東側堤防が決壊し、濁流は月山麓の城下町をのみこみ、富田川は町



挿図1 富田川河床遺跡の位置 1:50,000

並みを厚い砂の下に埋め込んだまま川述をしてしまったという。

またその悲劇の寛文6年新設された広瀬藩の第一代藩主松平近栄は、廃墟の中から新しい町づくりに着手しなければならなかつたのであるが、幕府へ提出した次の文書によってその洪水(註1)の事実を知ることができる。

一、川向宮川去午の秋洪水にて満水残の町五町程御座候此の古町を居屋敷広瀬の方へ引越

申度奉存候 以上

寛文七丁未二月廿一日

松平上野介

寛文6年の洪水の当時の記録は多くないが、以上1、2の資料でその事実を知ることができ
る。

2 歴史的経緯

富田城の創設の歴史は必ずしも明らかではない。伝説によると、平氏の家入梶原景清が築いたとも、佐々木氏の創設になるともいわれるが事実は明らかでない。

富田城を拠点にした動きが文献上にあらわれてくるのは京極氏の出雲守護代尼子持久の頃からで、応仁年間（1467年～69年）出雲守護代尼子清定の頃からその活動が明瞭になってくる。

尼子氏は清定の子経久が、文明のころより守護と離反して独立し、急速に大名として成長し、その末年からその子晴久の天文年間には、晴久の毛利氏の本尼郡山城の襲撃、大内・毛利勢の富田城攻撃がある。

このように戦国時代の進展とともに、その城下に町の形成が進んだことが考えられ、南は富田川上流の福頓から北は下流の安来市赤江方面まで町ができていたという口碑には誇張はあるにしても、当時の状況を反映していることが考えられる。

その後尼子氏は永禄9年（1566年）毛利との抗争に敗れ、富田は毛利氏の領するところとなり、その在番の武将がおかれたが、關ヶ原の戦後富田を領していた吉川広家は周防に退き、かわって慶長5年（1600年）浜松から堀尾氏がこの地に移封されて入城した。

新しい領主堀尾吉晴は、この地が位置的、交通的にも問題があり、また狭隘で、領国支配の近代的体制づくりに欠陥ありと判断し、松江にその地を選び、慶長16年（1611年）松江城に移った。

松江城建築に際し、富田城は解体してその木材等を運び利用したといわれ、家臣団はもちろんであるが、寺院等も多く新しい城下町づくりの必要から移住させた。

ここにおいて富田は尼子経久以来二百数十年にわたる出雲における中枢的位置を失い、俚謡にもあるように「思いがけない松江ができるて、富田は野となる山となる」の凋落を余儀なくされ、またその後の洪水などで往時のおもかげを失い、衰微していくと想像される。

その後堀尾氏は断絶し、京極氏が襲ったが同氏も断絶、寛永15年（1638年）松平直政が信州松本城から転封して松江城に入った。そして運命の寛文6年には直政没し、綱隆襲封に際し、4月に第2子松平近栄が3万石の広瀬藩主として分封されたのである。

このとき富田は、松江に移城の慶長16年から54年を経過しており、地方の一集落となっていたが、寛文7年の松平近栄の文書によれば、寛文6年の秋の洪水で5町ほどを残し富田川の川底に封じこめられたのである。

富田川河床遺跡はこのような経緯の遺跡であり、ほぼ17世紀中頃を下限とする城下町の遺跡である。

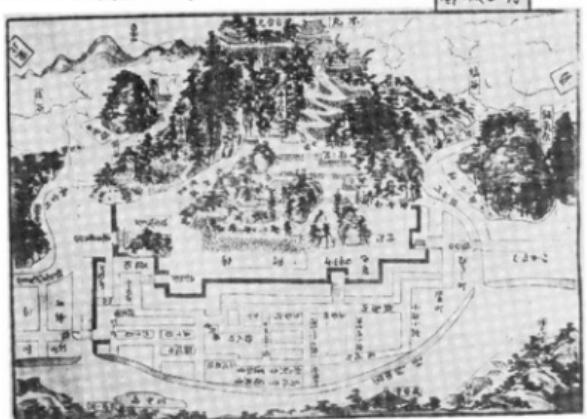
3 遺跡の鳥瞰

後世の富田城の絵図には、富田川沿いに安来市の赤江附近まで町並みが記入されているものもあるが、富田城周辺についてみると月山の北西、西、南西には城下町が描かれていて、ほぼ現在の飯梨川の位置から月山山麓までの間に町並みが展開していたことが推定されるのである。

したがって町並みは河床以外の堤防の内外にも存在するのであり、河床遺跡はその一部である。

しかし河床以外の部分は堆砂が3m以上におよび調査は技術的にもはなはだ困難であり、また河床の約3分の1は常に流水があり、この部分では遺構は洗い出されてほぼ完全に破壊されている。

河床で遺構のほぼ確実に遺存する範囲は、流路に露出した井戸跡、石列の残存遺構などの分布から推定して、富田橋から下流約1.5kmの間の川原約50000m²に及ぶ。富田橋から上流地域は完全に水没していて検索できず、また下流地域安来市部分は河川改修工事等で擾乱されいて遺構は破壊されていると判断される。



插図2 「月山城図」

昭和49年度から51年度までの3年間発掘調査したのは、新宮谷の谷口正面の現大字名で「町帳」と称する区域の一部で、当時の町帳の範囲にほぼ該当すると考えられる。

それではここにどのような町並みが存在したのであろうか。

ここで文献的資料から富田城下町の輪郭を追究してみたい。しかし利用できる資料はきわめて少なく、間接的な推定しかできない現状である。

(1) 富田城下町絵図について

富田城及びその城下町を描いた絵図はかなりの数が残存している。これらは細部にわたる町、道路その他の位置あるいは名称などに相異はあるが、構図はほぼ同一で基本的な差異は認められず、おそらく原本的な古絵図から次々転写されたものと想像される。製作年代はほとんどが不明であるが多くのものは江戸中期以降と推定される。

明治44年松陽新報社版『雲陽軍実記添付の「月山城図」^(註5)』をみると、月山の西麓方面には富田川との間に次のような町、路、寺院等が描きこまれている。

ひきぞ町、益町、板原町、馬喰町、上本町、下本町、中町、給人町、小池殿組、鉄炮町、五丁目、六丁目、いう町、との町、新町、小谷小路、半四郎小路、おやかた小路、十王堂小路、金尾洞光寺路、本成寺、寿仙寺、誓願寺、円照寺、勝願寺、信楽寺

もとよりこれらの絵図に記載された町の位置、大小路の配置などにわかに信じ難いが、おおむね次のようなことは言えるように思われる。

- (1) 富田城の西面には堀がめぐらされ、その外側に城下町があった。
- (2) 商工業の職種名等を冠する町、寺院などが町割されて存在していた。
- (3) 主要な大路がほぼ南北にはしり、その間を小路で連絡していた。

(2)『寛永三年富田庄之内広瀬村御検地帳』(田方及び畠方)について

寛永3年(1626年)といえど、松江移城より15年を経た時期である。広瀬村は現在の大字広瀬にはほぼ該当すると考えられ、月山西麓の城下町とは旧富田川をはさんで対峙する近い位置にあった。

検地帳に記された土地の所有者をみると、肩書に住所、職業、屋号、身分などが記入されており、このうち住所については広瀬村内の者が多いが、地理的距離的に関係のふかい月山西麓の元城下町の居住者と推定されるものがかなりいる。その町名について集計してみると表のとおりである。

また前記絵図「月山城図」に小谷小路、おやかた小路などとあるのに対応すると思われる小谷(小谷屋)、おやかた(おやかたや)(親方あるいは御屋形)などと呼ばれる富裕者と推定される者の土地がかなりある。

表にあげた町名の明らかな町人の中には10歩以下の小面積の所有者も多いが、しかし筆数にして田畠の総計で23%を占めることは注意されることである。これにより月山西麓の城下町が

なお概形を存し、かなりの人口を有していたことが考えられる。

ここで前記絵図「月山城図」の町名と検地帳町名を比較してみると、一致するものが多い。即ち中町、六丁目(六町目)、馬喰町(馬口郎町)、板屋町、萱町(茅屋町)、いう町(魚町)、ひきき町(ひきき町)は一致し、後町は不明だが、中町の北に下町が、上本町の南に上町が想定される。

また検地帳にただ「町」とあるのは、もともと同業者の集住で形成された古い町に対して、名称の固定していない比較的新しい町を指しているとも考えられ、絵図で新町とあるのに該当する可能性が強い。この附近は現大字町帳の区域である。

このように検討すると、少なくともこの絵図において町及びその相対的位置等については、ある程度信をおいてもよいと考えられ、したがって前項で絵図から想定した月山西麓附近の富田城下町の構成についてもおおむね正しいと判断されるものである。

町 名	旧 方 (243筆)		新 方 (476筆)	
	筆	人	筆	人
町	21	14	53	36
本町	3	3	18	15
上町	2	1	—	—
中町	1	1	—	—
下町	—	—	1	1
後町	—	—	1	1
六町目	1	1	—	—
馬口郎町(「はくらふ町」とも)	1	1	12	9
板屋町(「いたや町」とも)	2	2	9	5
茅屋町(「かや町」とも)	—	—	16	12
魚町(「う於町」とも)	—	—	11	5
ひきき町	—	—	9	6
計	31 (13%)	23	130 (28%)	90

表1 寛永3年富田庄之内広瀬村御検地帳記載富田城下町居住者集計表

(3) 「寛文八年広瀬町屋敷帳」について

(註7)

寛文8年(1668年)といえば、寛文6年の洪水で富田旧城下町が潰滅したあと第一代広瀬藩主松平近宗が新しい町づくりに着手し、ようやく町の形ができあがった時点である。

松平近宗は、前記したように寛文7年幕府に提出した願書の中で、去午(寛文6年)の秋の洪水で残った町5町程を広瀬の方へ移したい旨を述べている。(近宗は、寛文7年、広瀬にあった城安寺を富田の海士子(尼子)屋敷へ移し、その寺地に藩館を造りここに移った)屋敷帳

町 種類	板屋町	本町	下町	鐵治町	魚町	清水町
刀剣・鐵治関係	とぎや、灰吹や	灰吹や	鐵治大工	鐵治や(8)		さやし
家具等製造・建設関係	鐵ふろや、大工、下駄屋、うすへりや、井筒屋、井積	井積	木や、たうすや	桶や(2)	木挽、麻ふろや、桶や	たたみや(2)、大工
日用品・その他製造・販売関係	らうそくや(2)、薬や(2)、はんどうや(2)、桶や、花や、こまや、かみや	薬や、繪書	笠ぬきや、笠や、らうそくや(2)、こまやなべや、かわごや、かみや(2)	らうそくや(3)すや、笠や	へにや、桶やはりや	紙や(6)
食料品販売関係	米や(4)、魚や	米や、油や、麹や、熊や(2)、たうふや(2)	米や	油や	魚や	塩や
衣料品加工関係	紺屋	ゑもんや、紺屋(5)	紺や(2)	紺や(2)		
牛馬関係			博労	博労、馬持(2)		
住居関係	ながや(「長や」をふくむ)(4)		家作(3)、なかや	家作(5)		家作(8)
サービス業関係		志らかや	ごせ、手子、釘立(針立か)		かミゆい	
金融・宗教・役人関係		日代、くらもとや	藏元や、山伏	神主		庄や、神主、寺山伏、たかや
出身地その他関係	丹波や、宍道や、ここに(2)面高や(2)、杵築や、慈田や、屋ぶや、今だや、あべや、鳴や、田中や(「田中」をふくむ)(3)、田原や(4)、福田や、中村、水野、にへ(2)、松や、兵庫や、今村、水、中村	大文字や、大和や、田中や(4)、長谷川(2)、井河、いせや、系どや、あべや(2)、石原屋横田や(2)、桶や、竹下や、成田や	岩や、阿部や黒坂や、作繁や、田中や、井河、いせや、系どや、あべや(2)、石原屋横田や(2)、桶や、竹下や、成田や	坂田や、さなだや、福や、田中や、ちどりや、横田や、実松やかどや(2)、これからや、田原や、すかまやいせや、黒や	植田や、安井や、戸や、長谷川、坂田や比田や	松江や、こにぎ、松原、高橋や、新宮や
血縁不明		4	8		3	1
記入なし		1		1	1	1
計	57	44	52	47	26	31

註 (1)家号等のあとに数字は該数を示す。数字記入なしは1戸。

(2)かみやと紙や、紺屋と紺やは同種と思われるが記載のとおりにした。ながや(長や)となかもとも同種と思われる。

表2 寛文8年広瀬町屋敷帳記載屋号等集計表

に記載されている町は6町であるが、これはこの願書にあるとおり富田旧城下町の一部がもとになっていると考えられる。

新しい広瀬の城下町の基礎は、このように富田旧城下町の移転によってつくられたのであり、その構造にはかかるての富田旧城下町の実態があらわれていると考えられる。例えば町名はかかるての名称がそのまま用いられていることが考えられ、町人も多くもとの町の住人であったと考えてよいと思われる。また屋敷帳についてもかかるてのそれがかなり生きているように想像される。ともあれこの屋敷帳の分析をとおして部分的であれ富田旧城下町の構成を推定することができるようと思われる。

屋敷帳の内容は、板屋町57、本町44、下町52、鍛治町47、魚町26、清水町31の6町 257軒について、面及び入（屋敷地における間口及び奥行）と屋号あるいは身分を付した家主名を記載するものである。

面は3間から特別長いもので12間1尺5寸まで種々あるが、入については12間が2、15間が1のほかすべて16間である。

各戸にはほとんど屋号が記されている。屋号は家主の職種名あるいは出身地名を冠したと推定されるものが多く、他に身分などを記したもののが若干ある。記入なしは4例である。これを町別に集計すると表のとおりである。

表をみると、出身地名その他を冠する戸が大きな比率を占めており、その職種が不明で資料的制約はあるが、鍛治町で「鍛治や」が47戸中19戸と集居の形態を比較的保持しているものの、板屋町、魚町についてはその町名の示す職種に対してその職種の同業者の集居が明瞭でないことが注意される。このような同業者の集居性の低さは、近世的な城下町の町割の規制が強くおこなわれていないことを示すものと考えられ、富田旧城下町を旧態を保持したまま移転したことのあらわれであろうか。

この表により、商工業者の分布をみると、紺やが比較的多いことは周辺の農山村の原料生産と城下町における加工業という社会的分業の関係が看取されるものであり、広瀬耕発展の素地はこの時代にすでにあったのかもしれない。また米やなど町居住者のみを顧客にもつものもあるが、魚や、塩や、薬や、はんどや（はんどは大きな水棗のこと）、紙やなどは町人と周辺農山村の農民とにわたる広い顧客を対象にしていた商工業である。

なおまた6町のうち板屋町、本町、下町、魚町の4町が、前記の寛永3年広瀬村検地帳に記載された町名と一致することは注意されるところである。同検地帳記載の町が月山西麓の城下町に所在した可能性の強いことはすでに論じたところであり、すくなくともこの4町はかかるて月山西麓の城下町にあったことが推定されるのである。

これらのことから富田城下町は、寛文6年に近い時点でなおかなりの人口を擁し、周辺農山村と密接な関係をもちながら経済的に活動していたことと推測できるのである。

町(面口)	3	3.15	3.3	4	5	5.15	6	6.15	6.3	8	9	9.15	9.3	10	12.15	計
板屋町	5	18						3	28			1		2	57	
本町		4			1		1	32	2		2	2			44	
下町	8	5	18	4			4	11					2		52	
鍛治町	24					21				2					47	
魚町	10			1		15									26	
清水町	9		2			19				1					31	
鍛治や	9	1				7				2					19	
家作	11			1	4										16	
らうそくや	2	3				2	2	1					1		11	
米や	1	1						4							6	
甜や		3				2	1	4							10	
紙や	2	2				5									9	

表3 宽文8年広瀬町屋敷帳面の長さ別戸数集計表

次に面(間口)の長さについてみると表のとおりである。まず町別についてみると板屋町、本町、下町は3間3尺(6.37m)、1間を182cmとする。以下同じ)ないし6間3尺(11.83m)の家が多く、鍛治町、魚町、清水町は3間(5.46m)ないし6間(10.92m)の家が多い。板屋町、本町、下町に比較的大きい家が多かったことが知られる。また種別にみると鍛治や、家作などについては3間が多く、6間の家がこれにつぐ。後述するように、昭和51年度調査で鍛冶工跡と推定される遺構が2軒隣接して検出されたが、周囲を区画する石が乱れていて正確な数値は求められないが、いずれも約5.5mの間口であり、この屋敷帳の記載が宮田旧城下町の屋敷割の書き写しとみると、これらは3間間口の鍛治屋であったことになる。

- (1) 安来市誌編さん委員会編『安来市誌-地理』(昭和45年)
 - (2) 浜田測候所編『島根県既往の災害並に豪雨調』(昭和9年)、広瀬町史編纂委員会編『広瀬町史上卷-江戸時代』(昭和13年)、安来市誌編さん委員会編『安来市誌-灾害』(昭和45年)
 - (3) 母里小学校編『郷土母里』(昭和12年) 所収
 - (4) 島根県史編纂掛編『島根県史』第8巻(昭和5年) 所収
 - (5) 桑原英二『まぼろしの戦国城下町』(昭和49年) 参照
 - (6) 広島大学附属図書館所蔵
 - (7) 広島大学附属図書館所蔵
- (妹尾豊三郎・蓮岡法障)

III 調査の概要

1 調査の概要

富田川河床遺跡の発掘調査は、新宮橋の下流240m～500mの左岸川原を対象として、49、50、51年度の3ヶ年にわたりて行った。発掘調査に先だって、49年度、第1年次の調査では航空測量によって地形測量を実施し以後の調査に備えた。発掘区画は航空測量時に設定した直交する4つの基準点を用いて、一辺30mの方眼を設けて行った。その名称は上手側に向って立ち、右上の交点の名をあて、C G～C N、D J～D Nというように呼称した。また、この方眼の内側には一辺3mの方眼を設け、これを小区画とした。3年間の調査対象地は上流部端と下流部端で1.2mの比高差がみられ、幅は上流の新宮橋に近づくほど狭くなっているが、既に25m～35mである。

第1年次(49年度)の調査は、新宮橋の下流350m～500mのD K区～D P区を対象とした。その結果、周囲を石垣状の石列で区画した建物跡5ヶ所、井戸跡11ヶ所、その他、杭列、建物跡に伴う幅の狭い道路などが検出された。出土遺物としては、各種の陶磁器類をはじめ、瓦器、土師質皿、木製品、金属製品、石製品、鐵治工房に関係する轆の羽口などがある。それらの遺物は、膨大な量におよんでいるが、その大半は遺構面を覆っている堆砂中から検出されており、遺構の時期を明確に決定する資料は得られなかった。

第2年次(50年度)は1年次の調査区の上流C K区～C I区の発掘調査を対象に、1年次調査で実施できなかった黒灰色土層の掘り下げを行った。その結果、根石や掘立柱の建物跡3、井戸跡6、木桶6、鐵治関系のものと考えられる工房跡状遺構2、杭列3、石組溝などの遺構を検出した。遺物は第1年次と同様に、唐津、伊万里、備前などの陶磁器類、瓦、土師質皿、木製品、金属製品、石製品、轆の羽口などが出土し、その大半は堆砂の下層にあたる黒灰色土層から検出されて注目された。

第3年次(51年度)の調査は、2年次調査区の上流C H区とC G区B H区の一部1000m²について行った。面積的には狭いものであったが二層にわたりて発掘し、幹道と考えられる道路跡1、さらに、この道路に沿って両側に6棟の建物跡を検出した。これらは当時の町並を考えるうえできわめて重要な意味をもつものとして注目された。その他の遺構としては、木桶2、性格不明の石列等がある。遺物は唐津、伊万里をはじめ、多量の陶磁器類、漆器の模、下駄などの木製品、キセル、古鏡などの金属製品、石臼などの石製品が出土した。なお、3年次の調査は2年次の調査で激しい湧水のため途中で断念せざるを得なかつた土層觀察用のトレチ子を入れることに成功し、その結果、調査した遺構面より下層にも生活面が存在する可能性が強まった。また、新宮橋の下流約40m付近の両岸の川原を調査した結果、今まで調査の鍼を入れたこ



插図3 調査区の地形と発掘区画

とのなかった右岸にも遺構が存在することが判明した。この調査では建物跡1、井戸跡1をはじめ石列、池状遺構などが検出されている。

高田川河床遺跡は、川原に存在している為、すでに流水に没している所があり、また、一度以上水に浸されているところが大部分で、個々の遺構の構造、その時期など十分に把握得ない面が多くあった。また、増水によって遺構面が冠水したり、測量用の遣り方、発掘器材が流失するなど困難をきわめた。さらに、作業員、補助員など人的資源の不足もあって、予定より大幅に遅れることが多かった。

調査は3年次に分けて行ったが本来一つの遺跡であるので一括して、遺構、遺物を種類別に分けて取り扱うこととした。（川原和人・ト部吉博）

2 検出遺構

3ヶ年の調査では建物跡16、井戸跡15、工房跡状遺構2、道路跡3、木桶9、杭列5など多種多様な遺構が検出されたがここでは、その種類別に概要を記述することとする。

(1) 建 物 跡

S B 001 DN区とCN区にまたがる南北方向に細長い建物跡である。この建物区画内には井戸跡S E 003が存在する。

この建物は南北残存長16.2m、東西推定長16.2mを測るかなり大規模なもので、一部分しか残っていないが、東、西、南にはそれぞれ雨落溝が確認されている。また、この建物にはしきり状の南北に走る石列が2列ある。一つは、この建物の東側の一辺から西へ9mのところで井戸跡S E 003の右敷きの南縁を形成する溝あたりから北へ延るもの、いま一つは、やはり東側の一辺から西へ既ね6mのところで、この建物の南辺の石列に直交して北へ延るものである。この地区的調査は遺構の確認が主たる目的であったので、これを1棟の建物区画として取り扱ったが、さらに詳細な調査を行えば、あるいは2棟以上の建物区画である可能性もある。柱根および根石の検出は行っていない。

S B 002 CM区の南西隅に位置する南北方向に長い建物跡である。この建物の東側を画す石列の東には道路跡S S 001がこの石列にそってあり、井戸跡S E 004が南側を画す石列の内側にそって存在する。南には建物跡S B 004がある。

この建物は南北残存長13.5m、東西推定14.5mを測るがその詳細な構造については明らかにしていない。

S B 003 CK区の東側に位置し、南側には井戸跡S E 008が接して存在する。主軸はS B 001、002より若干西へふれる。

この建物は東西長7.4m、南北残存長18mを測る南北方向に長い建物で東側には幅20cmの石積みの雨落溝が伴っている。この建物を区画する石列は三段に積まれており、この石列の下には木杭で止められた胴木が西側では、ほぼ全体に確認されている。柱根は径20cmの皮付きのも

のが一本確認されているが他は未調査である。

SB 004 D L、D M区に位置する建物跡でその南辺と東辺が残存する。この建物の北には建物跡S B 002、西には杭列S A 001があり、建物跡S B 005の上に建てられている。主軸はS B 001、002より若干西にふれる。

SB 005 D L、D M区に位置する建物跡と考えられる列石遺構である。前述したようにS B 004の石列の下をくぐって南北に石列があり、その面は東側を向いている。主軸はS B 001 002より若干東にふれている。(前島己基)

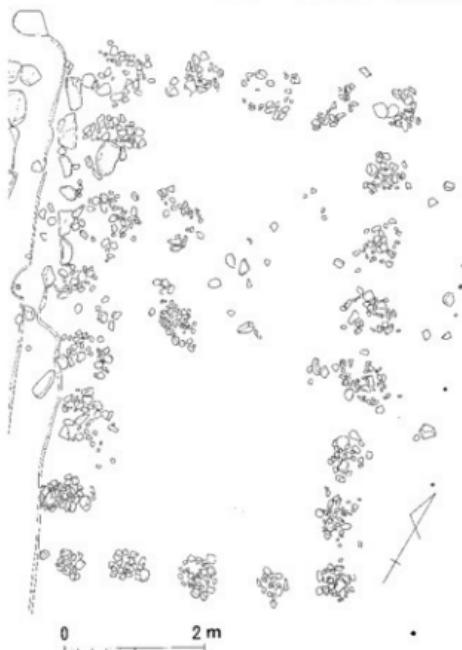
SB 006 C K 区の南西の隅に位置する2間×3.5間の根石と礎石をその基礎とする建物である。北西のコーナーには井戸S E 010がその長方形石敷の南東角を接して存在し、また、北のコーナーには円形の石敷を有する井戸S E 009が近接する。西には溝を狭んで道路S S 002が、東にはの痕跡と考えられる杭列がこの建物と平行して存在している。

礎石は北西のコーナー近くで1ヶ所残存するのみである。この礎石は50cm×30cmばかりの川原石の自然石を利用したものであった。根石は径約60cmから80cmの範囲のものが24ヶ所認められた。この根石から想定した柱間寸法は桁行、梁行とともに1mで小規模ながらしっかりした構造の建物である。

この建物に伴う遺物は根石の中から唐津が1点検出されたにとどまる。

SB 007 C J 区の東部に位置し、井戸S E 010から北西にのびる石組溝S D 001とはほぼ平行して存在する。この建物の北には木桶の残欠が認められた。この建物はS B 006と同様、礎石と根石をその基礎とする建物である。しかしながら、その規模、構造ともいま一つ明らかでなかった。また、根石、礎石の上面でかなりの唐津、伊万里が検出されており、直接関連するものかどうか、はっきりしないがこの建物の時期を想定する上で有力な手がかりとなろう。

SB 008 C I 区とC J 区にまたがる掘立柱の建物である。南側には工房跡状遺構がある。柱根は太さ10cmのものが3本列をなして検出された。柱間寸法はお



捕図4 SB 006実測図

のものは2.2mである。また、この柱列とほぼ平行して1m南側に太さ5cmばかりの小さな杭列が5本並んでおり、SB-008と密接な関係がうかがえる。

(ト部吉博)

SB-009 CH区の北東隅に位置する。この建物は、建物の区画を示す石列が長方形に廻るものと思われるが、わずかに間口の一辺と、2~3個の石が残る奥行しか残存していない。間口の石列は、20cm内外の割石を用い、石の面を道路跡のSS-003に向けて築造しており、その長さは約3間を測る。

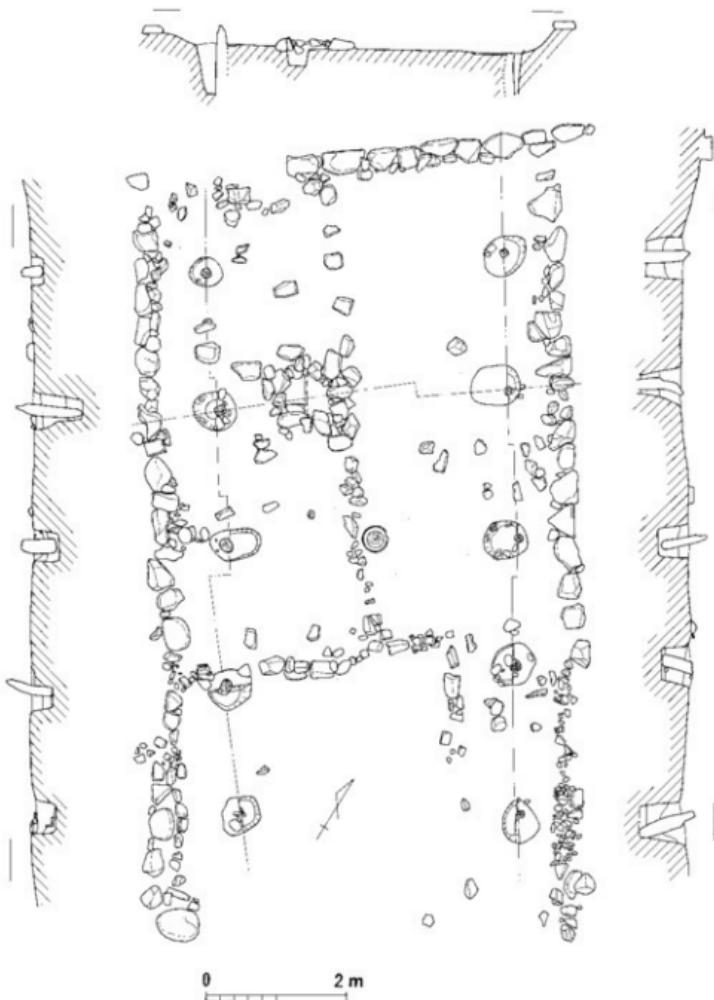
SB-010 CH区のほぼ中央に位置している。建物区画を示す石列は、間口で約3間奥行残存長約6間半を測り、本米、細長い長方形をなしていたものと考えられるが、この区画の南西側は、川の流れによってすでに土砂が流失しているため、全体の規模を明らかにすることはできなかった。北側の間口にあたる部分に存在する石は、道路跡のSS-003に沿って連なり、間口の東側では約1mの幅で、平らな石を敷きならべていた。また、この建物区画の北側には、何らかの施設の礎石と思われる石が一辺約5mの正方形に点々と配置されていた。これらの石は火を受けた痕跡があり、この造構の内側の北側中央部には、スラッグ片が混入し、堅く焼き締った焼土が存在していた。

SB-011 この建物はCH区の南西側に位置する。北側には道路SS-003が存在し、東側および西側には、それぞれ建物跡SB-010、012が隣接してある。建物の区画を示す石列は、保存状態が悪く、規模の詳細は不明であるが、本来細長い長方形であったと考えられ、幅は隣接しているSB-010、012の建物の石列の状態から考えて約3間と推定できる。長さは、東側の石列から6間半までは確認できたが、それより先は欠失しているため確認できなかった。また、東側の石列は、SB-010の西側の石列と並行して走り、雨落ち溝の性格を持つものと思われる。さらに建物敷地内の北側中央部には、1.5m×1mと0.4m×0.6mのスラッグ塊が二カ所認められた。

SB-012 CG区の東端に位置し、SB-011の南西側に接して築かれた建物で、長方形の建物区画内に掘立柱を有するものである。建物の区画は、石列によって形成され、間口3間、奥行は5間以上である。奥行の石列は、間口から8mまでは、長さ20cm~50cmの石を用いているが、8m以東は、10cm内外の小石を使用しており、しかもこの部分の石列はやや南側に屈折して延びている。柱は、間口で2本、奥行で5本ずつ存在し、南西隅の1つを除いてすべて径約20cmの皮付きの柱根が残存していた。それらの柱間寸法は、梁行で約4m、桁行で約2mであり、柱は、それぞれ深さ20cm~80cmの円形の堀り方を持つ。建物の敷地内には、敷地を区画する石列が存在するが、その石列は間口のほぼ中央から南東に建物の区画を示す石列と平行して走り、間口から約7mの地点で南西の奥行から派生した石列と直角にぶつかり、建物敷地内の中央から北東に約2m行った所で再び南東に向きを変えている。また、建物の敷地の中央よりやや西側に位置する所には、敷地内に存在する石列に接して、石積みで築かれた、径約1mの円

形の炉跡的な性格を持つと思われる施設が存在していた。

SB 013・SB 014 BH区の南西に位置する建物で建物の敷地を示す石列が間口の一辺のみ残存する。この石列は、石の面を道路跡S S 003に向け、割りと大きな石を用いて築いてい



插図5 SB 012

る。長さは約3間を測る。

S B 015 C G 区の東側に存在する建物で、S B 012の建物の柱とほぼ同じ方向に存在しているが、約1mあまり東側にずれ、S B 012の建物の区画を示す東側の列石と重なる。礎石は、根石しか残っていない所もあるが、6カ所検出された。柱間寸法は、南西から北東方向に約1m、南東から北西方向では径2mを測る。（川原和人）

S B 016 新宮橋調査区のP 2 グリッドで検出した北西から南東に延る掘立柱建物である。この建物はこの調査区の下層で検出されたもので、井戸S E 015が埋め立てられた後その上に建築されている。さらに、南西側にはこの建物の主軸から10°南にふれた石列が近接している。規模は不明であるが、柱根が3本2m間隔で並んでいた。柱は太さ10cmの角柱でありS B 012と比較して興味深い。（ト部吉博）

(2) 井 戸 跡

S E 001 D P 区の西側に位置する石敷き、石積みの井戸である。西側には井戸S E 002がある。調査区最下流の造構である。石敷きは流れ中に存在する為、破壊が著しい。井戸側は長径0.9m、短径0.6mの六角形をなす。

S E 002 D O 区に位置する石敷き、石積みの井戸である。この井戸の東側には井戸S E 001がある。石敷きは流れに洗われている為、破損が著しく、IR状をとどめない。井戸側は長径1m、短径0.7mの六角形を呈す。

S E 003 C N 区の中央に位置する石敷き、石積みの井戸で建物跡S B 001の区画内に存在する。石敷きは3.7m×3mの東西に長い長方形を呈し、南側の一辺には幅40cmの東西方向に走る溝が併設されている。井戸側は径約70cmの六角形である。

S E 004 C M 区の南西隅に位置する石敷き、石積みの井戸である。この井戸は建物跡S B 002の区画の内側に存在しており、北西には井戸跡S E 005、南西には杭列S A 001、南には建物跡S B 004がある。石敷きは2.5m×4mの東西に長い長方形で、そこに使用されている石は比較的均正な大形のものである。井戸側は径約80cmの五角形をなす。

S E 005 C L 区の東側に位置する石積みの井戸である。この井戸の東側には建物跡S B 002、南東には井戸S E 004が、南には杭列S A 001がある。井戸側は完全には確認されておらずその規模、構造ともに不明である。

S E 006 C L 区の中央に位置する石積み、石敷きの井戸である。南西には井戸跡S E 007、東側には杭列S A 002がある。石敷きは破損が著しく、その形を把握出来ないが、井戸側は長径80cm、短径70cmの六角形をなす。この井戸には石積みの井戸側の内側に長さ1m、径約60cmの木製円形井筒を二段にはめ込んだものが置かれていた。この木製円形井筒は幅約10cm、厚さ6mmあまりの恵目板を竹釘で接合したものであった。

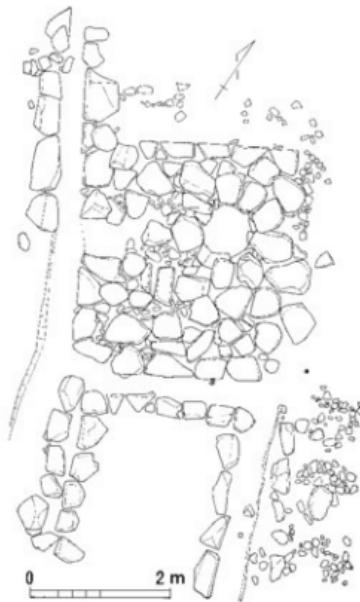
S E 007 C L 区の西側に位置する石積みの井戸である。西側には建物跡S B 003、北東に

は井戸跡S E 006がある。井戸側は径約50cmの円形である。石敷きは確認されなかった。

SE 008 D K 区の北隅に位置する石敷き、木製円形井筒の井戸である。D ラインをはさんで北側には建物跡S B 003が存在し、東側にはS X 001がある。石敷きは $2\text{m} \times 4\text{m}$ の長方形をなしている。木製円形井筒は径50cmばかりの柾目板を竹釘で接合したものであった。

(前島己基)

SE 009 C K 区の西側に位置する石積み、石敷きの井戸である。石敷きは3.5mの円形を呈し、この東側には半円形に石組の溝が作っている。井戸側は石敷き面で80cm×60cmの六角形をなす。



挿図6 SE 010

SE 010 C K 区の西端に位置する石積み石敷きの井戸である。石敷きは $4.0\text{m} \times 4.4\text{m}$ の長方形をなす。この石敷きの西側の一辺には北西—南東に延る幅40cmの石組溝 S D 100 が併設され、南側の一辺にも石組溝が併設されている。この溝からは寛永通宝が1枚検出されている。井戸側は柾円形で長径65cm、短径60cmを測る。敷石は比較的均正な割石を使用しているが中には来待石の石造品を再利用したものがある。この井戸は井戸側に利用されている最上端の石組がはみ出していることから、この井戸は二回以上の造り替えが行なわれた可能性がある。

SE 011 C J 区のほぼ中央に位置する石積み石敷きの井戸である。北西には工房跡状遺構 S X 004、北には木桶 S X 006があり、東側には北西—南東に延る杭列 S A 005がある。この井戸の石敷きは自然破壊が著しく、井戸側は既に現地表面よりかなり上に遺存している。井戸側は70cm×60cmの五角形をなす。石敷の下には人頭大の詰石がなされ、この詰石の中からは伊万里の白磁碗が検出されている。

SE 012 C J 区の西側隅中央に位置している石積みの井戸である。北西には工房跡状遺構 S X 005が接して存在する。また周囲には金属性のかたまりが多数認められた。井戸側は80cm×60cmの五角形をなす。石敷きの構造は不明である。

SE 013 C I 区の中央に位置する石積み、石敷きの井戸である。石敷きは若干乱れてはいるが約 $2\text{m} \times 2\text{m}$ の方形をなすものと考えられる。この下には詰石がなされており、白粘土によって目張りがなされており注目された。井戸側は80cm×60cmの五角形である。また、この井

戸の下流2mにはカヤ状の植物質の堆積が厚さ7cmにわたって帶状に認められ、井戸原形の存在も考慮される。

SE 014 CI 区の西側に位置する石積み、石敷きの井戸である。石敷きは 3.5m × 3m の長方形をなしている。東のコーナーからは東一西方向に延る石組溝が始まっている。井戸側は60cm × 50cm の五角形である。井戸側、石敷きとも SE 010・SE 013 と比較して石が小さく、その作りも雑である。

SE 015 新宮橋調査区 P 2 グリッド内下層で検出した井戸である。深さは検出面から 2m 40cm を測る。この井戸は挽絶の後埋立てられており、その上に建物跡 SB016 が建てられていた。廃棄、埋立てがなされていたために、石積みかどうか、石敷きがあったかどうか明らかでなかったが、埋土中に大きな割石が多く混入していたことから、上部は石積みの井戸であった可能性が

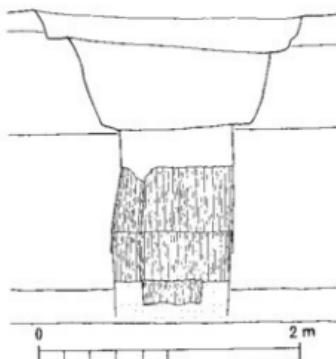
強い。下部の構造は掘り方上面から 1m 20cm 下で径 90cm の木製円形井筒が 2段にはめ込まれた状態で検出され、この井筒の内側の底近くにはさらに径 40cm、深さ 20cm ばかりの小型の木製円形井筒が埋設されていた。2段にはめ込まれた木製円形井筒は上下段とともに幅 6 ~ 7cm、厚さ 1cm の縦長の板を竹釘で横につなぎ外側に竹のタガをはめた桶状のものであった。また内側には厚さ 1cm、幅 2cm のそえ木が内面の横方向に確認された。底には深さ 30cm にわたって川砂と川原石が確認された。

遺物は底近くから白磁、白磁青花、等が検出されている。 (ト部吉博)

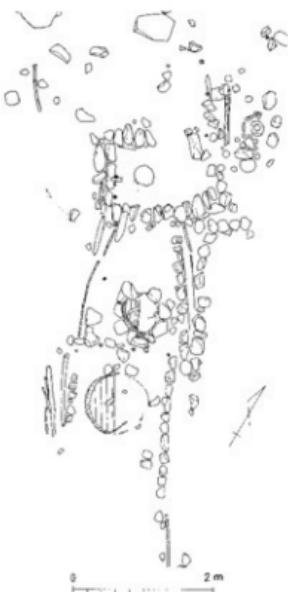
(3) 工房跡状遺構

SX 004 CJ 区の西側に位置し、大小 2 つの木桶 (SX 007、SX 008) と、1 つの長方形石囲いが中心となる遺構である。東側には石積遺構 SX 003 がある。

木桶 SX 007・SX 008 の東西両側には、幅 15cm のせまい溝状の石列が南東にのび、その溝



插図 7 SE 015



插図8 SX 004

状の石列の中に樋状の木材が縦断している。SX 007とSX 008の間には石によるしきりが見られ、このしきりと溝状の石列(樋状の木材)によって、2つの区画を構成している。SX 007の北西1mには南北に走る溝状の石列と接して、 $1.3m \times 0.8m$ の石畠が認められ、さらに、この石畠の北のコーナーにも $0.9m \times 0.7m$ の石畠が存在した。このうち、前者の石畠の内側には径25cmの黄色粘質土の落込みが1ヶ所認められた。

この遺構に使用されている石は全体に小型の石であったが、大きさがある程度そろっていることが注目された。

SX 005 CI区とCJ区にまたがり、木と竹によって構成された2つの平行する長方形の区画を中心としている遺構である。南側には井戸SE 012、木桶SX 009、北には土坑SK 001・002があり、この周囲は最も多くスラッグのかたまりが検出された。CJ区にある区画はほぼ $2.3m \times 2.6m$ で、径4cm～6cmの竹によって他と区している。この内側には礎石状の石が竹の区画と平行して

10ヶ所認められた。この区画からは磁石が検出されている。CK区にあるものは $1.8m \times 3.1m$ で径2cm～4cmの竹と径8cmの木で画しており、木によるしきりが2ヶ所認められた。この木によってくぎられた中央の小区画には、直徑36cmの石臼の上半部がすえてあり、この石臼の周囲には径10cmばかりのスラッグ魂がめぐっていた。また、しきりをはさんで南側の小区画には径1cm～2cmの小さな竹がしきりと平行して幅40cmにわたって敷かれていた。 (ト部吉博)

(4) 道路跡

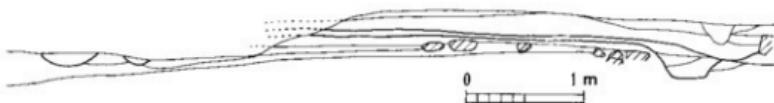
SS 001 CM区に存在する道路状の遺構である。この道路跡は建物跡SB 002の東側に接して平行に作られている。幅約1.5mで小石が敷いてあり、南北方向に続く。側溝などは検出されていない。建物跡SB 002の主軸と平行なところからこれらとほぼ同時期の遺構と考えてよからう。 (前島己基)

SS 002 CJ区とCK区の境に存在する幅3mの南北に延びる道路跡である。北側には井戸SE 010、東側には溝をはさんで建物SB 006が平行して存在する。この道路跡の東西には溝が検出されている。 (ト部吉博)

SS 003 CH区の北側に位置し、建物跡SB 009～SB 014の間口に沿って北東に走る道路遺構である。長さは27m確認されている。幅は北側が流水で破損しており、はっきりしないが、建物の開口の列石から判断して既ね6mを測る。この道路は南側に上縁幅約1m、深さ約

20cmの浅い側溝を伴っている。路面は中央付近が高く、両側へゆるく傾斜して断面がカマボコ状をなしている。したがって側溝の道路側の上場は必ずしも明確ではない。このことは、路面の排水と密接な関係があるものと考えられる。

トレレンチによる断面の観察によれば、帯状のかたくしまった砂質土と小石の互層が深さ75cm、にわたって認められ、この道路を築くにあたって版築がなされていたことが判った。また、この版築層の中に幅30~50cm、厚さ20cmの腐植土が認められ、平面的に追求したところ道路に平行して走っており、この面の直下には15cm大の石が混っていた。のことからこの道路には新旧二時期の造構面が存在する可能性も考慮される。(川原和人)



挿図9 SS 003断面図

(5) 木 桶

S X 006・007・008・009・010・012・014・015・024 木桶はその残欠を含めて9ヶ所確認された。計測値等別表に示す通りであるが、工房跡状造構に伴う007・008・009の他、独立して存在するものもあり、その用途は必ずしも明確ではない。(川原和人・ト部吉博)

	直 径	深 さ	出土遺物	備 考
S X 006	95cm	75cm以上	偏前擂鉢	
S X 007	85cm	55cm以上		工房跡状造構 S X 004内
S X 008	55cm	36cm		タ 完形、口縁に円形石組
S X 009	85cm	22cm以上	3段	タ S X 005に近接
S X 010	不明	不明	有	
S X 012	タ	タ	有	
S X 014	約85cm	40cm以上	有 土師質皿	隣接して3本の杭?あり
S X 015	約80cm	60cm以上	有	
S X 024	不明	不明	不明	

木 桶 一 覧 表

(6) 杭 列

S A 001 C L、D L区にまたがる杭列である。東側には建物跡S B 004がある。この杭列は篠竹杭と皮付きの木杭で構成されており、その方向はほぼ建物跡S B 004の主軸に平行する。

S A 002 C L区に位置する杭列である。これもS A 001と同様、篠竹杭と木杭によって構成されている。方向は建物跡S B 005より若干東にふれている。(前島己基)

S A 003・004 C K 区に位置し、土手側から川側に向って走る杭列である。004は礎石建物 S B 006の主軸と平行しており、この建物の屏とも考えられる。S A 003・004とも皮付きの木杭で構成されている。

S A 005 C J 区に位置し、土手側から川側に向って走る杭列である。西には井戸 S E 011 本桶 S X 006が存在する。やはり敷地を画する施設であろうか。 (ト部吉博)

(7) 土 壤

S K 001・002 共にC J 区の西側で検出した土壤で工房跡状造構 S X 005の北側に位置する。二つのうち東側に位置する 001は径80cmの不整円形をなす。深さは30cmで底は船底形である。002は径1mの不整円形である。この土壤からは唐津、下駄が検出されている。

S K 003 新宮橋地点P 2 グリッドⅢ・Ⅳ小区で検出された新期の土壤で長軸3.9m、幅40~85cm、深さ20~40cmを測る。この土壤からはウラジロの炭火物があたかも敷いたような状況で出土した。

S K 004 新宮橋地点P 2 グリッドⅡ小区で検出された古期の土壤で長径2.2m、短径1.4m深さ20cmを測る楕円形を呈す。S K 005によって切られており、焼土がつまっていた。

S K 005 新宮橋地点P 2 グリッドⅡ小区で検出された土壤で長径1.6m、短径1m、深さ45cmを測る。平面形は楕円形をなす。

S K 006・007 新宮橋地点のP 2 グリッドⅡ小区で検出された古期の土壤である。006は径1mの円形で深さ20cmを測る。007は幅1.5m 長さ2.4m以上、深さ37cmの土壤である。(ト部吉博)

(8) その他の造構

S X 003 C J 区の中央に位置する石積造構である。この造構は一辻2mのL字状にめぐる石列を伴っている。この石列の内側に1.5×1.6mの範囲に高さ20cmに石を積み上げている。

(ト部吉博)

S X 016 C H 区の北側に位置し、道路跡 S S 003の上部に存在するもので、人頭大の石を用いた石壘状の集石造構である。南北に14m認められ、この南端から南東に向方向を転じたものが3mあまり延びている。性格はいま一つ明らかでないが、石垣のくずれたものと考えることもできる。石の間にはしまって寛永通宝が出土している。

S X 017 C H 区のほぼ中央に位置する石壘状の集石造構である。S X 016とほぼ平行に走る。この造構は長さ約17m、幅約1mの範囲に石が存在している。ここは、地面がちょうど斜面になっており、この造構の両端では石がこの斜面に張り付けられていた。これらの石に伴って瓦文瓦、スラッグが混っていた。ここでも寛永通宝が検出されている。

S X 018 B H 区の南東隅に位置し、道路跡 S S 003に沿って長さ5m、幅1mの長方形に10cm~20cmの小石がぎっしりと敷きつめてある石敷き造構である。長辺の両側には石列が伴っている。南側ではこの石列がS S 003の溝を兼ねている。(川原和人)

S X 019・020 新宮橋地点P 2 グリッドで検出された石列である。ともに北西—南東に延る石列で、019はⅡ小区に存在し、西側に鷺指大の河礫群があり注目される。ともに上層の遺構である。

S X 021 新宮橋地点P 2 グリッドの上層で検出された石敷き造構である。この石敷きは径20~30cm大の石を敷きつめたもので幅60cmにわたってL形に認められた。

S X 022 新宮橋地点P 2 グリッド中央東側に位置する下層の遺構で池跡を思わせるものである。この遺構は長径3.1m 短径4.6m の階円形に石が積み上げられているもので、その面は内側にある。この内側底には径5cmばかりの自然木(枝?)が数本検出され、また木の葉を思わせる炭化物が多数検出された。遺物は備前・美濃等が検出されている。

S X 023 新宮橋地点の北側に延する下層の石列である。建物跡S B 016・井戸S E 015を切って作られている。S B 016とは約10°の振れが認められ、この建物の区画をなす石列となる可能性は少ない。

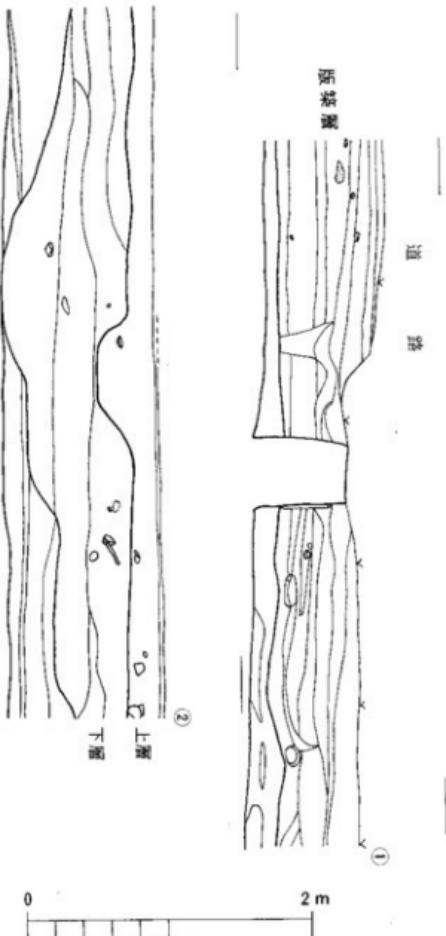
(ト部吉博)

(9) 層位関係

49年度、50年度調査では、以前からの表探資料によって時期の新旧が想像されていたが、同一面での重複関係の他は追求することができず、トレーナによる調査も十分な成果があげられなかった。

51年度調査区と新宮橋地点では川の水面が下ったことと、地盤が49、50年度調査区より若干高かったことも相まって、ある程度下部まで掘り下げることができた。

51年度調査区ではC H 区で川と直交する09ラインに幅1mのトレーナを深さ0.8m(海拔17.6m)長さ



插図10 51年度調査区①・新宮橋地点②断面図

約22mにわたって設定した。この断面観察では深さ0.7m～0.8mで道路跡S S 003の版築層の下限を確認するとともに、道路面で新旧二時期ある可能性が考慮された。この版築層は、造構面全体にわたるものではなく、道路部分とその両側若干の部分に限られており、この道路の性格を考える上で重要な意味を有するものといえる。

道路より下部に相当するところから白磁青花、るつぼなどの遺物が検出されているが断面観察だけなので造構面をなすかどうか明確ではない。版築層以上では唐津、伊万里が検出され、土師質土器、瓦質陶器は希薄であった。この遺物出土量に見る状況は49・50・51年度とも同じであり注目される。

新宮橋地点ではP 2グリッドとP 4グリッドの発掘を行ったが、このうちP 2グリッドでは川と平行な畔を残して平面的に掘り下げ、地表下185cm（海拔16m 65cm）まで掘り下げることができ、この間に上下二枚の造構面を検出した。上層は地表下70cm～90cm、下層は地表下1m～1m 60cmで確認された。上下層ともに、それぞれ造構を伴ない確実に新旧が把えられ注目された。

下層では土師質土器が一番多く、白磁、白磁青花といった輸入磁器、備前、伊賀など伝統的な陶器が主流を占め、唐津は若干の出土をみたにとどまった。これに対して、上層では土師質土器、唐津が群を抜いて多く、白磁、染付、備前、伊賀などは希薄になっている。このことは伊万里の出土がまれなことともに注目された。（川原和人・ト部吉博）

3 小 結

3年間の調査で検出された造構は、建物跡16、井戸跡15、道路跡3、工房跡状造構2、木桶9をはじめとして、性格不明の集石造構、土壤、杭列などがあった。建物跡は、周囲に石を廻らした長方形の建物区画を持ち、中には据立柱や礎石を有しているものがあり、石組の溝を伴う場合が多い。それらの建物は、時期が異なるためか、それともS S 003の道路が未発掘部分で曲っているためか明らかでないが、上流から下流に行くに従って建物の並びがゆるやかに東に向きを変えている。建物跡の中にはS B 012の様に保存状態が良く柱根まで残存していたものや、建物跡の区画内に、スラッグを含む堅い焼土が伴い、鍛冶関係の施設ではないかと考えられるものなどがあった。

次に、井戸跡を見てみると、井戸はDラインとC 05ラインの約15m幅の中に大体位置しており、建物区画内にあるものと単独に存在するものの2通りがある。井戸の内部構造については、一部の井戸の調査しか実施できなかったため、不明瞭な点が少なくないが、①石敷き・石積み・木製円形井筒 ②石積み・木製円形井筒 ③石敷き・木製円形井筒の他、外見上石積みだけのものがある。これらの中にはS E 013のように井戸の周辺にカヤと思われる植物質の堆積があったことから井戸屋形の存在を考えさせるものや、石敷きを2回以上修理したと考えられる井戸跡などが存在していた。

第1次、第2次の調査で検出された遺構は、多岐亡粧の感を呈していたが、3年次目の調査で幹線道と考えられる幅約6mの道路跡を検出したことによって、はじめて企画性のある町並みを考え得ることができた。この道路は27m余りしか確認していないが、ともあれ、幹線道と思われる道路に沿って、3箇所に統一された建物跡が、6棟検出されたことは、3年間の調査を通して最も注目すべき事実で、今後、この道路を中心に町並みを追求検討していく必要があろう。また、幹線道と思われる道路跡の他に、建物跡に沿って、幅2mあまりの道が2例検出されている。

その他、調査で検出された遺構の中で看過できないものとして、工房跡状遺構がある。工房跡状遺構は、木材、竹それに石などを用いて長方形の区画を構成し、その中に転用した石臼や木桶を埋設しているもので、この区画内や隣接した所に多量のスラッグが存在していることから、鍛冶関係の工房跡と考えられる。

次に、遺構の時間的な関係をみてみると、第1次、第2次調査では下層遺構の調査を行なえなかったため、わずかに建物跡S B 004とS B 005の切り合い関係、S S 002の東側溝が建物跡S B 006の下に入りこんでいることが判ったにすぎない。第3次調査では、2層にわたって調査を行い、上層に存在していた遺構としては、建物跡S B 015、石壙状の列石遺構S X 016、S X 017などがあり、その下に道路跡や建物跡を検出したが、道路跡はさらに2回以上の工事を行っている可能性が考えられた。新宮橋地点では上下二層にわたって建物跡・井戸跡・土壙・池跡状遺構・石列などの遺構が検出され、遺物の組合せも上層と下層では若干の変化が認められ注目された。この様に第3次と新宮橋地点の調査で検出された遺構は時間的な差が認められるものであったが、第1次、第2次、第3次、新宮橋地点の調査で検出された遺構との相互関係については明確につかむことができなかった。（川原和人・ト部吉博）

III 遺 物

遺物としては瓦、土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、土錘、ふいごの羽口、ルツボ、窯道具、宝鏡印塔、五輪塔、粉引き白、茶白、砥石、硯、刀剣、鉄鎌、釘、煙管、青銅皿、鍋、古銭、小柄、下駄、曲物、桶材、屋根材、鍋蓋、漆器、くさび、箸状木製品、貝類、木の実、具足（小札）等が出でているが、ここでは陶磁器、漆器、木製品、石製品、金属製品の項目に分けて記述する。

(1) 陶 磁 器

陶磁器類としては須恵器、土師質土器、瓦質土器、瓦、備前、伊賀、瀬戸、美濃、唐津、伊万里、中国製の磁器と不明の無釉の焼結め陶がある。

伊万里（第VII図1~10）

伊万里は白磁の碗も出土しているが、ここに述べるものは9の青磁釉の被るものと除いて他はすべて染付けである。碗（1・5・8・9）と皿（2・3・4・6・7・10）の2種類がある。磁胎は白色（2・4・7）、わずかに灰色がかった白色（6・8・9・10）、白灰色（1・3）と暗灰色（5）を呈するものがある。釉はやや青味被った白色（1・2・4・6・7・8・10）と薄い灰色（3）、灰色（5）がある。1は刷部にやや薄い灰青色の鼻須で花木を描いている。2は器厚は厚いが焼成は良好で見込みにやや黒ずんだ鼻須で山水文が描かれている。3は鼻須も薄い黒青色に発色しており焼成は良くない。4は極めて薄い粗悪な鼻須で花木が描かれている。5は円弧文の鼻須が黒味がかった灰緑色を呈するもので焼成も悪い。6は2箇所に草花文らしきものが配置されている。鼻須は灰青色の薄いものである。高台内に釉切れが見られる。7は口縁部が小さく外反するもので内面には手なれた筆で草花文が描かれている。鼻須はやや暗い灰青色。8は網目文が描かれている。鼻須は薄い青灰色である。9は外側に青磁釉が被り、内面の見込みに黒味がかった鼻須で花文が描いてある。高台内は無釉で削りの痕跡がみえる。10は輪花形をした型物の皿である。内面に布を当てて押した跡が残っている。見込みに菊花文がムラのある鼻須で描かれている。

不明A（第VII図11~13）

これに属するのはいわゆる半磁器風の皿類である。11と12は暗灰色の胎土を呈すもので、断面三角形の高台を持ち、見込みに円弧文風に無釉の個所を持つものである。11は薄手で黄緑色の釉がかかる。12はくすんだ緑灰色の釉のかかるもので内面に幾何学文が描いてあるが発色が極めて悪い。13はくすんだ緑灰色の釉が厚くたまたま所で天青色になっている部分もある。砂の目跡が4箇所残っている。

不明B (第VI図14)

胎土は非常にきめ細かい白土を用いている。貫入の入った茶色がかった乳白色の釉が全面に被っている。ていねいな造りの碗である。この手のものは出土量は極めて少量である。

唐津 (第VI図15・16、第VII図17~45)

唐津は古い時期の製品から新しい時期の製品まで継続して出土しており、出土量も豊富である。表掲資料の中にはもっと多様なものがあるがここでは出土資料について記述する。まず第VI図の15・16であるが胎土が乳白色を呈し貫入の入った乳白色系の釉が被る点は共通している。15は山盃（ぐい呑み）、16は深い碗である。又16は15に比べて焼成が悪く釉切が見られる。以下はすべて第VII図のものである。胎土の中に砂を多く含むものが多い。(18~26・28~32・34・35・37~44)。器種は碗(17・24~27・37)、山盃(17)、香炉(18)、小壺(22)、皿(20・21・23・28・30~36・38~45)、向付(29)である。17は鉄分の少ない乳白色の胎土で釉は貫入の入った黄緑色を呈するものである。ていねいに削り出してある高台脇以下は無釉で高台内は鐵文が残り底切れになっており漆でとめてある。上半部は薄手の作りである。18は乳白色の灰釉が被るもので外側の肩部に鉄釉で鬼面文ととぐき文のようなものが交互に配してある。19は白濁した失透釉の被る既唐津である。底部は糸切りの跡が残り、内面中程に小さな目跡が3個所見られる。漆と思われるものが塗ってある。20・23・33は基筒底に近いもので高台脇はほとんど削り出しを行なわないかまったく行なっていない。口縁部は一旦くびれて外反し口縁端は内傾化している。目跡が小さく水挽きの時の痕跡の明瞭に残るグループである。20・23は釉は暗緑灰色、33は長石を含む灰白色の釉でときんが見られる。20は口縁の一方に黒い附着物がありあるいは燈明皿として使用された可能性もある。21は白濁した茶色の釉で内面には鉄釉で三葉と考えられる草文が描かれている。釉がとんだ部分もある。目跡は内面に4個所残る。22はあめ釉の被る小壺である。24は黄緑色の灰釉の被るもので高台は竹節形で三日月高台になっている。25は黒褐色の鉄釉が被るものである。26は乳白色の長石釉が被っている。27は薄赤茶褐色のきめ細かい胎土をもつものである。釉は上半部に白濁した茶色がかった灰釉が被る。28・31は朽葉の灰釉の被る厚手のものである。28は糸切り手法の見られるもの、共に目跡が残っている。29は2箇所に鉄釉が施されており、形状から絵唐津の向付と考えられる。釉は灰白色の長石釉で目跡が4箇所残る。30は貫入のある灰白色的長石釉が被り内面に鉄釉で文様が配してあるが刷毛でひいたような薄い発色のものである。目跡が4箇所残る。竹節高台でときんが見られる。32は見込みとの境界附近に1段の段をつけるもので、そこから開きぎみに上方に延びて口縁は一旦水平にさらに立上るのであたかも1条の条縞を形成しているようである(31・34・38・39・42・45)。32の高台は糸切り離しの手法が見られる。釉は白濁する乳灰色のものである。34は長石を含んだ灰釉、典型的な三日月高台で砂の目跡が良く残っている。35は長石を含んだ釉がかいらぎ状になっている。高台は三日月状。内面に目跡が4箇所残っている。

36は精選された極めて密な胎土で焼成も良い。黄緑色の灰釉が被り、内面には対称的に2個所に天目調の鉄釉で文様を配置している。砂の目跡がはっきり残りときんが見られる。37は濃黃緑色の良く融けた釉が被っている。38は濃茶褐色の釉、高台は糸切り離しで砂の目跡が見られる。39は底部を糸切り離し手法のままにして高台を削り出さないものである。40はわら白灰が融けなくてかせたようになっているもので、見込みに砂の目跡が残っている。41は胎土が乳白色をし釉は黄緑色を呈する灰釉の被るものである。焼成後に高台を磨研している。44も同種のものであるが胎土に鉄分の多い小石を含んでおり鉄釉を落したような吹出しになっている。42は長石を含む釉で高台は竹節高台になっている。43は底部が極めて厚い造りの特徴あるもので胎土は赤茶褐色を呈し、黄緑褐色の灰釉が被っている。底切れが見られる。45は比較的精選された胎土で釉も共に薄い茶色をしている。全体に薄手の造りで見込みに目跡が3個所残っている。

備前（第図46～51）

これまでに採集された器種を見ると三耳壺、壺、小壺、徳利、平鉢、擂鉢、甕、片口壺等多岐にわたっているがここでは擂鉢（46～49）、壺（50）、甕（51）について報告する。46は1.2cm巾の粘土紐による巻上げか輪積みの手法によって成形されたもので小石を多量に含んでいる。器表は暗赤茶褐色、断面の表面に近い所は灰褐色になっている。口縁が巾広く帯状に張出す、こね鉢か擂鉢の口縁部である。47の胎土は暗灰色の小石を含むものである。器表は赤褐色～暗茶褐色を呈し黄緑色の胡麻が被っている。1.7～1.8cm巾の粘土紐による成形で口縁部が巾広い帯状をなして上下に発達した擂鉢である。口縁部には2本の条線が入っている。48は小石混りの砂を多く含むもので焼成は良くない。胎土は薄乳茶色を呈し器表は暗灰～乳茶色になっている。口縁は巾広い帯状になって張り出しており、2本の条線が入っている。内面に荒い条溝をもつ擂鉢である。49は小石混りの鉄分の多いもので焼成は悪い。粘土紐による成形後に鉈削り調整をしている。内面に5～6本の条溝をもつ擂鉢である。50は甕の口縁部である。胎土は乳褐色を呈す小石混りの非常に荒いもので、器表は暗褐色となっている。口縁は折返して玉縁状になっており、内面に薄黄緑色の胡麻が被っている。51は大甕の口縁部である。ややや精選された暗灰色の胎土で器表は赤茶褐色を呈す。口縁はふ厚く折返して3本の条線が施してある。内側に白濁した黄緑色の胡麻が被っている。

土師質土器（第図461～63）

小さな破片なら相当量出土しているがここでは器形のほぼ判明するものについて述べる。61は底部に糸切り離し手法をそのまま残す平底の小皿である。小石混りの胎土で底部は粘土紐を巻いて成形しロクロを利用して内面をナデによる調整を行なっている。口径9.4cm、高さ2.0cm。62は小石が混入するが焼成は良好で胎土は灰色、器表は肌色をしている。底部裏には指圧による痕跡が明瞭に残るもので外側の上部及び内面を刷毛によるナデの調整を行なっている。口径

:1.5cm、高さ 2.4cm。63は62と同様な手法で造られている。但しこちらは口縁近くでくびれをもたせて口縁が外反する点に特徴がある。口径11.3cm、高さ2.4cmである。

不明C (第図60)

既述の資料であるが底部が判明したので収録した。大形の香炉であろうか。腰部の突帯にきざみ目を施しそこから垂直ぎみに上部にのびる器形である。口縁は水平方向に肥大し3本の条線を有するものである。胴部上半に印花文を横一列に密に施している。胎土は砂を多く含むもので黄乳褐色の緻密なものである。外側は薄く鉄釉を刷毛で塗ったと思われ濃茶色を呈している。

瓦質土器 (第図64)

瓦質土器の中で発掘によって得られたものはわずかである。11は小石を含むやや雜なものが極めて薄手に造っている。口縁部がやや肥大化して外側に張り出しておりナデによる調整が加えられている。他は荒く成形痕を残すものである。内面は粗い刷毛による横ナデ調整の上に7本の条溝を施している。内外面とも灰黒色を呈している。

瀬戸・美濃 (第図52~59)

数量的には少ないが時代的に巾のあるものである。天目釉の碗(52・53)、天目釉の皿(54・58)、志野の皿(55・56)、黄瀬戸の皿(57・59)について述べる。52の胎土は小石を含む粗いもので肌色をしている。釉は見込みと外側胴下半部に厚くたまつておらず、上部は飴釉状となっている。高台は削り出しで胴下半部にも施削りによる調整が行なわれている。立上り気味に来て口縁は外反する。53は乳白色のやや粗い胎土で隕胎部は薄黄茶色を呈する。天目釉がややかせたようになっている。胴下半部に施削りが施されている。口縁はやや外反するものである。54は黒褐色~茶褐色の釉が全面に被るものである。見込みに2箇所と底部裏に目跡が見られる。なお焼成後に漆で底部裏に松葉文が描かれているのは注目される。56は鉄分の少ない乳白色の密な胎土で釉は厚い長石釉が灰白色を呈している。輪花の形をした鍋の入った皿の全面に釉切りが見られる。57は灰色を呈す密な胎土で堅緻な焼成である。釉は全面に貫入のある薄黄緑色の灰釉である。高台内に目跡が見られる。58は砂分の多い乳白灰色の胎土で全面に黒褐色~茶褐色の天目釉が被っている。輪花形の小形の皿である。59は口径11.4cmのやや大形の皿である。乳白色の粗い胎土で焼成も悪く灰釉が融けきらずに白濁した黄緑色になっている。外側に釉切りが目立ち見込みの部分には釉が被っていない。55は乳白色のやや粗い胎土であるが焼成が良好で堅緻なものになっている。釉は灰白色の厚い長石釉が良く融けており全面に貫入が見られる。見込みには鉄釉で幾何学文が描かれている。胎土の中の鉄分が表面に吹き出しになっている部分がある。55は恐らく長方形の向付であろう。1箇所だけ短い脚部が残っている。隅の部分で2箇所内側へ押して変化をつけている。

中国陶磁（第Ⅳ図65～84）

第2次調査の時には中国陶磁の出土はほとんどなかったが第3次調査下層及び新宮橋地点の調査では染付を主体にして出土している。

染付（第Ⅳ図65～77）は碗（66～69・71・74）と皿（65・70・72・73・75～77）の2つの器種がある。磁胎は白色のもの（67・69）、やや灰色被った白色のもの（65・66・68・71・72・75～77）と灰白色のもの（70・73・74）がある。釉は白色のもの（66～69・76・77）とやや青味がかるもの（65・70～73・75）と灰色を呈するもの（74）がある。65はやや灰色味がかった呉須で見込みに二重円囲文を配し中に樓閣の庭に展開する岩石と樹木を配している。外側は牡丹唐草風な文様を連続して配置している。66の文様は細かな濃い線描で雲と鳳凰の尾か竜の胸のようなものが描かれ濃筆でぼかしてある。線描の呉須は所々で黒くなり、ぼかしの呉須は灰色がかった薄いものであるが全体的に明るい調子のものである。67は極めて薄手の作である。内外共胴部に軽妙なタッチで草花文が描かれている。68の内面は円囲文の中に斜格子文を配しさらに濃い呉須でクルス形の縁取りをした中に十字文を描いたりしている。69は外側の上部に麒麟と人型文様と思われるものを描き下半に唐草文を配している。呉須は灰色がかったくすんだもので良い発色でない。70の見込みには波と魚文が稚拙な筆で描かれている。内面口縁部下の文様は68に類似するものである。71の見込みには花文と考えられるものが、外側には一面に草花文と考えられるものが配置されている。高台内に長方形のわく内に幾何学文様らしきものが描かれているが文字のくずれたものであろうか。呉須は斑に発色している。72の見込みには連なる線で動物の下半身と考えられるものが描かれている。呉須の発色はやや薄い。高台内に削りの跡が残っている。73は葵窓底で盤付は無釉である。外側の上部には波の連続文様のようなものが描かれ、下部には剣先文が配されている。74は呉須の発色悪く暗青灰色になっている。見込みには線描と濃筆でカニではないかと思われる動物文様を描いている。75の外側には唐草文が描かれ見込みにも文様があったと考えられるが欠失している。稍切れが見られる。76は72と同じく高台内に削りの跡が見られるので見込みに花卉文が描かれている。77は76と同種の薄手の小皿である。高台の基部は釉切れになっている。高台内には錢貨形の中に「永長春」などの文字が呉須で描かれている。

白磁（第Ⅳ図78～82）はすべて皿である。79はやや灰色被った薄手のものである。口縁部で外反し、口縁端下は稜をもつ。80は磁胎はやや灰色を呈すが薄手の焼成は良好なもので釉は白色を呈す。盤付は露胎で黄褐色になっている。高台脇は釉切れが目立っている。口縁は水平方向に外反する。磁胎の鉄分が吹出している所がある。80は磁胎、釉ともにわずかに灰色がかった白色で薄手の造りになっている。口縁は他の資料と同じく大きく外反する。81は磁胎、釉共に乳白色を呈す薄手の小型の皿である。79と同様に外反する口縁端下に稜をもつものである。盤付は無釉で高台脇に釉切れが著しい。82は乳白色的磁胎でやや粗いものであるが焼成は良好で

ある。疊付を除いて全面に貫入の入った白色の釉が被っている。厚手の基筒底の白磁の小皿で染付でないものはめずらしい。外側には釉切れが目立つ。

青磁（第Ⅳ図83・84）は発掘による出土の絶対量が染付、白磁に比べて少ない。83は白灰色を呈する密な磁胎であるが焼成が極めて悪く青磁釉は良く溶け切っていない。したがって全面が乳褐色になっている。高台とその周囲を逸削り調整している碗である。84は灰色の密な磁胎である。厚手の底部をしており碗と考えられる。釉は青磁釉が薄い緑灰色になっており焼成はあまり良いものではない。

表探資料（第Ⅳ図85～101）

表探資料の中には中国陶磁の染付（85～89）、青磁（90～92）、白磁（93・94）や唐津（95～97）、瀬戸・美濃（98～101）の他に備前、伊賀、瓦質土器、無釉の焼縮陶の特異な一群などもあるが極大な点数であり、ここでは第3次調査までの発掘による出土資料を位置づけるようなものを取り上げておいた。85は底部無釉の基筒底の比較的大形の皿である。釉は貫入のある乳白色のものである。見込みにはやや黒っぽい吳須で帽子をかむる人物を描いている。外側にも人物と動物文様を略したようなものを2個所ずつ配置している。86は外側に唐草文様を描き、見込みには花卉文を配している。高台脇、内に削りの跡が明瞭に残る碗である。87は灰色の密な磁胎をもつ碗である。外側の上部に草か雲を思わせるものを下半部に唐草文を描いている。内面は見込みに二重円筒内に花卉文を描いている。吳須は灰青色で高台内では釉切れが目立つ。88は外側に唐草文（牡丹）、見込みに唐獅子が描かれている。高台内は釉が被っていない。89は吳須の発色の良いものである。外側口縁下に草文らしきものが、胴下半に劍先文が描かれている。見込みには小さな花文を配した碗である。90は厚手の大形の鉢であろう。青磁釉はややくすんだ調子のものである。内面に彫文様があるがはっきりしない。口縁が水平方向に延びて外反するもので輪花形になっている。91はややすくすんだ黄褐色がかった青磁釉である。外側に鎌文が施され、見込みは花文の中に文字が押印してある。高台はやや高く灰色の磁胎を有する底部の厚い碗である。92は灰色の堅鐵なもので釉は薄い緑灰色の青磁釉である。碗であろうか。見込みを中心にして描き文が見られる。93は磁胎は乳色を呈している。高台から底裏にかけて釉が被っていない。高台内の削りもはっきり残っておりやや雑な造りである。口縁は水平方向に外反する。94は輪花形の白磁皿である。磁胎も釉も純白で焼成の良好なものである。高台内に発色の良い吳須で錢貨の形を型どり中に上下左右の順で「天下太平」の4文字を描いている。なお高台脇は釉切れが目立つ。95は砂を非常に多く含む赤褐色の胎土で釉は失透性釉の斑唐津釉が被り口縁部に鉄釉を二重がけしている。口縁部の四方を隅入の形にした小皿である。97は絵唐津の碗である。砂を多く含むが胎土は精選されているもので薄黄茶褐色を呈す。胴部に鉄絵で大柄な唐草文を手なれたタッチで描いている。96は絵唐津の向付である。胎土は砂を多く含んだ粗いもので黄褐色をしている。露胎部は茶褐色を呈す。釉は長石を含んだものでやや厚く被

っている。見込みにおもだか文が真に瀟洒に描かれている。98は黄瀬戸の皿である。鉄分の少ない乳白色の胎土に明るい緑黄色の灰釉が被っている。見込みには梅花文が押印されている。99は縦部の向付である。乳白色のきめ細かい胎土に長石を含む釉が被っている。外側にとくさ文が描かれ1個所だけわずかではあるが緑の銅釉が被っている。見込みは草花文が鉄釉で描かれている。脚は共上の折返しのものである。100は天目釉の碗である。堅敏な焼成のもので釉も良く融けてガラス質の黒褐色を呈している。101は鉄分の少ない胎土で露胎部は茶褐色になっている。天目碗の通有のものである。(藤原久良・村上勇)

(2) 漆器・木製品

漆器・木製品類としては漆椀、酒杯、曲物、桶材、櫛、下駄、屋根材、不明の木工品などが出土している。

* 漆器 (第XII図 2 ~ 6)

漆器は椀が主である。2は口径約10.6cm、高さ3.5cm、高台径5.3cmの汁椀の蓋と考えられるものである。内側は紅柄漆。外側は黒漆の上に連続文様で楓葉と果実を紅柄と生黄の緑を用いて配している。描法は部分的に巧拙が認められる。栓系材を使用して薄手に造ってある。4は口径12.9cm、底径5.2cmの汁椀で高台を欠失するものである。内側に紅柄漆、外側は黒漆の上に紅柄で蔭輪に梅花紋を3個所に描いている。厚手の栓系材を板目ロクロ成形し、手を加えて直している。5は高台径が6.4cmで内外共に紅柄を塗った椀と考えられ、上部を欠失している。6は口径11.6cm~12.5cm、高さ9.0cm、高台径約5.8cmを計る飯椀である。厚手の造りで内側を紅柄漆、外側は黒漆の上に草文地扇面散しを配している。草文は生黄の緑、扇面は洗朱(黄IIの水銀朱)と生黄を用いている。生黄漆は粗粒子を含み濾した形跡の見られないものである。他に腰高(酒杯)がある。3は高さ約5.8cm、口径12.1cm、高台径5.0cmの酒杯である。内外共に洗朱を塗っているが高台裏は黒漆を用いている。ロクロを薄手にひいた上手物である。他の資料を合わせて検討すると3ヶ年の調査によって出土した漆器については次のようにまとめることができる。

①材質は栓系材タブ・トチなどと考えられる。

②木取りは板目ロクロ成形で厚手(4・6)の中世風のものと薄手(3)の近世風の2種があり、厚手のものはロクロ挽き後の手仕上げの跡が見られる。双方の間に成形技法の時代的発達の過程が認められる。

③形状は飯椀・汁椀(ともに蓋を含む)の四ツ椀と腰高の存在が見え椀類はほぼそろっている。

④漆塗は厚手のものは下地が極めて薄く、薄手のものは砥の粉の漆下地と推定されて塗面も堅硬である。内側が赤(紅柄)、外側が黒の様式が多い。

⑤漆は生漆、黒漆、透明漆(色漆の媒体)の3種が使用されている。

⑥顔料は紅柄、水銀朱（少量）、生黄があり生黄と黒漆との練合せの古式縁が認められる。

色は赤2種、黄、緑、黒の5色である。

⑦文様は藤輪に梅紋（4）、草文地に扇面散（6）、輪違紋、楓葉草文の連続文様（2）など総じて中世文様の伝統が顕著である。

⑧描法は没骨画法（つけたて）を主とし、藤輪は書き刺りで草花の葉すじに攝取り手法が見えるなど中近世の漆絵のモデル的手法である。

木製品（第Ⅱ図1・7~11）

木製品には桶材、扇根材、曲物、櫛、下駄、くさび、不明のものなどがあるがここでは下駄と櫛を取り上げる。7は男子用と考えられる露卯、銀杏齒の下駄である。全長約22.4cm、最大巾8.6cm、台の厚さ約1.5cm。前の歯を固定するため鉄釘が4本打ってあり、両脇の2本は俺の高さと同じ長さのものが、他の2本は短かい釘であると推定される。後方部にも釘の跡があり欠失部が補修されたことを示している。8は柄穴を2個持つ男子用の露卯の下駄である。全長約20.5cm、巾約8.2cm、台の厚さ2.7cmである。9は長さ約18.4cm、巾7.6cm、台の厚さ2.3cmの子供用の露卯の下駄である。釘で2個所程補修しており、かかとの部分を意識的に削って狭くしている。左右の縫孔は前方部の央向に向って顕著な傾斜をもって穿たれている。7も同様である。10は男子用と考えられる露卯・銀杏齒の下駄で長さ約21.0cm、最大巾8.5cm、台の厚さ2.3cmを計る。歯は台形の上部巾8.7cm、下部巾約10.7cmで歯の全長は約7.5cm、開角は25°である。11は子供用の連歯の下駄である。全長約17.6cm、最大巾7.1cm、高さ2.1cmでかかとの部分が細くなっている。前方部下端の磨滅が激しい。

他の資料と考え合わせると下駄は男子用は角丸の長方形のものが主である。女性用、子供用は卵形に近い大角丸でいずれも足形にあわせかかと部分を細軸に造るのを特徴とする。個々に特色はあるが露卯、連歯とも二枚歯の銀杏齒の下駄で中世風の様相を備えるものである。技術的には稚拙な所が目立つものもあり、手造りの「自家用品の風」がある。

櫛（1）は1点だけ出土している。長さ8.0cm、丈3.0cm、厚さ1.0cmで歯の数は一部欠損のため復原推定すると26~28になる。材料は不明であるが堅木が使ってある。小形の古風な弦月形で歯数と歯間の広いことからみて「ときぐし」と考えられる。歯は鋸びきの上に小刀削仕上げである。あるいは近世の寛政形というものの祖形とも考えられるものである。

(小島清兵衛・村上勇)

(3) 金属製品（第Ⅱ図1~22）

金属製品として刀・小柄・鎌・天秤皿・煙管・包丁・火箸・古銭その他種々雑多の金具類が出土している。ここではその一部について概要を記す。

刀（第Ⅱ図1）は富田川で出土した唯一のものでS B 010から検出された。全長35cmの脇差である。反りはほとんどなく、刃長は23cmを測る。棟X、刀口ともに認められ、棟区から茎尻

までの茎の長さは11cmで茎尻から6.5cmのところに目釘穴がある。棟の厚さは2mmで薄く、鎗などもみられない。小柄(第図2)は全長19cm以上で身の幅1.2cm、茎の幅0.6cmを測る。図示したものには棟区があるが、棟区のないものもある。銭(第図14)は身の長さ10cm、幅4cmを測るもので幅、厚みとも中央で若干ふくらむ。木製の握りを有している。第図17は包丁であるが折り曲げて銛に転用したと考えられるものである。煙管(第図5~9)は瓶首の大きく拡がるもので、当遺跡通有のものである。5は対になる。第図4は天秤皿である。銅製の薄手の作りで「天下」の刻印が2ヶ所になされている。第図3も4と同様の作りであるが銛止の跡があり、他の用途を考えた方がよさそうである。以上、記述した他に鉄鉈金具と思われるもの(第図11)、釘(第図18・19・20)、用途不明のもの(第図10・12・13・15・16・21・22)がある。古錢については表にして下にまとめた。(ト部吉博)

(表1)
出土古銭一覧表(川原和人)

古銭名	初	鑄年	枚	数	古銭名	初	鑄年	枚	数
開通元宝	唐	621	61		治平通宝	北宋	1064	4	
乾元重宝	唐	758	1		熙寧元宝	北宋	1068	62	
唐國通宝	唐	959	1		元豐通宝	北宋	1078	75	
宋通元宝	北宋	960	4		元祐通宝	北宋	1086	62	
太平通宝	北宋	976	6		紹聖元宝	北宋	1094	18	
淳化元宝	北宋	990	11		元符通宝	北宋	1098	3	
至道元宝	北宋	995	21		聖宋元宝	北宋	1101	32	
咸平元宝	北宋	998	3		大觀通宝	北宋	1107	7	
景德元宝	北宋	1004	14		政和通宝	北宋	1111	18	
祥符元宝	北宋	1008	22		宣和通宝	北宋	1119	2	
祥符通宝	北宋	1008	8		淳熙元宝	南宋	1174	3	
大观通宝	北宋	1017	15		大定通宝	南宋	1178	1	
天聖元宝	北宋	1023	34		紹熙元宝	南宋	1190	1	
明道元宝	北宋	1032	1		嘉泰通宝	南宋	1201	2	
景祐元宝	北宋	1034	7		嘉定通宝	南宋	1208	1	
皇宋通宝	北宋	1039	83		淳祐元宝	南宋	1241	1	
重和元宝	北宋	1054	5		熙宋元宝	南宋	1253	1	
毛和通宝	北宋	1054	1		景定元宝	南宋	1260	1	
嘉祐元宝	北宋	1056	4		永樂通宝	明	1408	46	
嘉祐通宝	北宋	1056	20		寔永通宝	日本寔永	1624	5	
治平元宝	北宋	1064	3		銘文不明			10	
合計									680

(4) 石製品(第図1~9)

石製品としては、石臼、砥石などの生活関連遺物の他に、五輪塔、宝篋印塔などの石造物の残欠が多数検出された。ここでは、石臼と砥石の一部について記述する。

第図1、2は、建物跡S B O 12の敷地内で二次的に利用されていた茶臼の上臼と下臼である。上臼は、直径20cm、高さ11cm、供給口径3cmを測り、挽手口には、子持菱が施されている。下臼は、受鉢の直径38cm、臼面の径19cm、高さ10cmを測り、心孔は、2cmあまりの方形を呈する。また、臼面には、6本~9本の単位で9区分された溝が存在し、受鉢の外側面および底面

にはのみの痕が残っている。砥石は、荒砥と仕上砥の2種がある。荒砥（第XII図4～9）は、検出した砥石の大半を占め、4角形～6角形の断面を持ち、面は、平らなものと、弧状に凹んでいるものがあり、4のように幅0.6cmの溝状の凹みを持つものもある。仕上砥（3）は、やや硬い石材を用いており、断面は4角形で、面には使用痕が残る。（川原和人）

（5）小 結

ここでは遺物についての年代的なものに焦点をあてて考えてみたい。

遺物は陶磁器、木製品、金属器、石製品などが3ヶ年の調査区の中で平均的に出土したと考えることもできるかもしれない。もっとも個々の遺物を項目別にみると陶磁器の場合は伊万里、唐津を中心としたものがSX-010～SX-007とSX-001附近に多く出土している。第3年次にも遺物跡を中心にして比較的多く出土しているというような点は指摘できるであろう。ただこの遺跡の場合は黒褐色粘質土層の表面を川が流れていたわけであるから地表面に近いものはかっての流路によって一定の場所に集積されたということも一概に否定できない。下駄類がこの区域から多く出土したことを合わせて考えてこれら新しい時代相を表わす遺物群が川の土手側に溜ったと考えられなくもない。ここではもっと確実な層位関係にあるものから見ていくことにしたい。この遺跡においても下層を掘れば古い時代相を示すものが出てくるわけで、第2年次の場合はSX-013、第3年次の場合は掘下げ区の下層遺構、トレンチの下層、さらに上流の新宮橋地点などから出土したものがこれにあたる。それらを総合すると次のようになる。

出土資料で最も古いものは染付、白磁、土師質土器、備前の中から組合せで出土した新宮橋地点の下層遺構であろう。次に染付、唐津などを多く出した第3年次の掘り下げ区でそれと相前後するのが新宮橋地点の上層で、ここでは唐津と土師質土器が主に出土した。第3年次の黒褐色粘質土層、第2年次の調査区などから出土したものは伊万里を含んでいて、相対的に新しいと見なくてはならないだろう。個々の遺物では第XII図65・73・82などが15世紀にさかのぼり得るものであろう。他の中國陶磁の染付、白磁は16世紀に入るものである。ただ青磁の出土量は想像以上に少ないことを付け加えておく。これらに日本製の陶磁が続くが第XII図64などの瓦質土器や土師質土器などは古い中國陶磁と共に伴するものである。備前は室町時代の資料もあるが実測図でみてもわかるように口縁部が肥大化して条線の入るもの、すなわち桃山時代以降のものが主体を占めている。唐津は第XII図17のように古い様相を備えたものが出土しているが大半は桃山時代から江戸の初めにかけてのものである。これが伊万里へと受け継がれていく。中國陶磁と唐津の隙間を埋めるものが瀬戸、美濃であろう。不明Cの資料は江戸初期をさかのぼるものではない、それはA・Bについても言えるであろう。これらのことから遺構の年代的な位置付けを求めるにあたっては新宮橋地点下層遺構は桃山時代を下ることはない。第3年次の掘り下げ区下層も桃山時代あたりに比定できよう。新宮橋地点上層遺構も江戸時代初頭を下することはあるいは問題は第3年次の上層の遺構及び第2年次、第1年次の上層となる遺構であろう。こ

これらの遺構を覆う陶磁では唐津の出土量に比較すると伊万里の量が少なく出土状態からみてもこれらの遺構も江戸の初頃をはなはだしく超るものではなかろう。したがってこの遺跡が寛文6年に水没したとしても、遺物の出土状況からみて、現在残っている上層の遺構がすべてその当時のものであるという考えには疑義が生じよう。洪水時の遺構はほとんど削平されて良好な状態で残っていないと考えてみた。このことは漆器や金属製品の考察からみても蓋然性があると思う。この頃ではS X-005附近から磁石が多く出土したことや遺物自体の考察もおこなわなくてはならないところであるが当面の問題でもある遺構と遺物の大まかな関係を追究しておくにとどめる。

最後にこの道路から表面採集されている資料と調査によって出土した資料を比較して問題点を提起しておきたい。今回は表面採集品についても実測図を掲げたが、10余年間にわたって採集された資料の中に青磁が3～400点あるのに、この3年間の調査では数点しか検出されていないこと、染付も1,000点近い採集量に比して調査における出土量が少ないと、備前はあきらかに鎌倉時代の完器の壺が採集されているのに調査における出土品は新しいことなど、あるいは発掘前に出土が予想された古い時代の資料が、採集品に比して割合の上で極端に少ないとが上げられる。瓦質・土師質土器についても同様である。このことは調査が層位的に新しい層を扱っていて古い層まで達していないのか、比較的新しく形成された町並の部分を掘ったという、発掘地点の問題か、あるいは生活を営んでいた人間の集団の問題を反映した事象なのか、今後解明すべき点であろう。

(村 上 勇)

註 (1) 別に表面採集品は数十点におよぶが開元通宝のほかは宋銭、明銭等の数の比率はほぼ似ている。

V 金属滓と羽口分析

鍛冶房跡と推定される遺構から出土した多数の金属滓と羽口状の遺物の中から、羽口状遺物について3個、金属滓について12個の資料をとりあげ、調査をおこなった。

(1) 外観

一般に精錬滓は飴状の平滑な破面に気泡の小孔があり、鍛冶滓は表面粗雑で、破面も多孔質になっているとされているが、確定的ではない。またこの金属滓には表面が、赤褐色を呈するものと、黒褐色を呈するものとの二種類があるが、これは含鉄分の多寡もその一因であろう。

(2) 組成

羽口および金属滓の成分は次の通りである。これによると金属滓は鉄類を治錬又は加工する時にできたものと考えられる。

番号	SiO ₂	MnO	P	S	Al ₂ O ₃	V ₂ O ₅	Cr ₂ O ₃	TiO ₂	CaO	MgO	Sn	As	FeO	Fe ₂ O ₃	TFe		
2 羽口	61.64	0.07	0.05	0.06	—	0.02	11.25	1.07	3.27	0.30	0.002	0.002	0.38	0.28	1.55	1.67	
11号	66.48	0.04	0.07	0.20	0.02	Tr	0.02	11.18	0.36	0.22	0.03	0.027	0.002	—	1.58	3.03	3.35
12号	66.64	0.05	0.06	0.02	0.01	Tr	0.02	7.69	1.14	0.22	0.03	0.002	0.002	—	1.44	3.33	3.34
1号 金屬	19.45	0.29	0.07	0.24	Tr	0.03	2.03	3.35	0.53	5.25	0.02	0.002	0.002	0.45	35.06	19.48	41.21
2号	18.76	0.51	0.48	0.07	Tr	0.02	6.14	3.89	1.58	2.33	0.03	0.002	0.02	0.45	39.08	14.21	41.77
3号	26.40	0.41	0.46	0.03	Tr	0.02	0.02	3.71	1.12	5.63	1.90	0.002	0.015	0.67	23.99	19.48	32.95
4号	14.08	0.24	0.35	0.19	0.02	0.01	0.02	2.48	0.78	2.38	0.50	0.002	0.001	0.39	24.71	27.78	39.54
5号	21.56	0.25	0.26	0.05	Ni	Tr	0.02	2.54	0.78	1.49	0.60	0.002	0.004	—	18.97	27.79	34.18
6号	16.98	0.14	0.25	0.06	Ni	Tr	0.02	2.43	0.35	1.03	0.40	0.002	0.007	—	37.53	25.50	47.03
7号	16.24	0.19	0.25	0.10	Ni	Tr	0.03	2.74	0.33	2.32	0.70	0.002	0.006	—	42.39	26.28	47.14
8号	14.80	0.19	0.26	0.16	Ni	0.32	0.10	2.14	1.24	1.75	0.50	0.002	0.005	—	43.97	21.45	49.59
9号	13.90	0.24	0.28	0.07	Ni	Tr	Tr	2.36	1.07	1.75	0.66	0.002	0.004	—	48.29	21.58	52.28
10号	11.16	0.32	0.32	0.08	Tr	Ni	3.88	0.31	2.32	0.72	0.002	0.004	—	39.96	24.43	46.14	
11号	15.92	0.38	0.35	0.06	0.01	Tr	0.33	2.45	Ni	2.41	0.74	0.002	0.004	—	45.41	19.80	49.15
12号	15.20	0.33	0.32	0.09	0.01	Tr	0.05	3.77	0.69	2.41	0.57	0.002	0.006	—	22.84	34.81	42.11

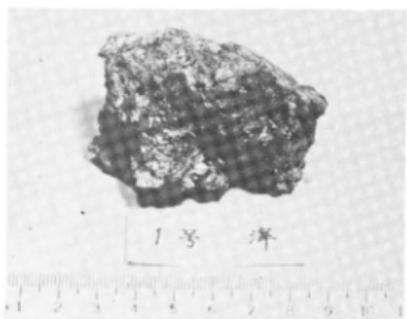
羽口および金属滓について調査した結果をまとめると次のとおりである。

- (1) 羽口の3個については何れもSiO₂が60%以上で、これにAl₂O₃を約10%含有する耐火粘土で造られた極く一般的なものである。
- (2) 金属滓12個の資料を調査した結果では、多少成分的に微差が認められるが、何れも次の諸点を勘案すると、鍛冶滓と認めてよいと思う。
 - (1) 遺跡の立地条件から考えて鍛冶工房（小鍛冶）と考えた方が常識的であろう。

(2) 「たら」の精錬滓にしては、 SiO_2 を主体にして、 Al_2O_3 、 CaO 、 MgO 等の鋼滓系の含有量が比較的に少ない。

(3) また、精錬滓にしては、 TiO_2 の含有量も少ない。

但しこれは原料の破鉄の TiO_2 が少なければとの反論もあるが、過去のデーターでは殆んどの滓が数パーセント（少ない場合で1%以上）の TiO_2 を含有している。（住田 勇）



結語

昭和49年度から51年度まで3年間おこなわれた富田川河床遺跡の発掘調査は、富田城下町の遺跡の実態について部分的ではあるがいろいろなことを明らかにした。また従来の外面的な観察にもとづく推測に対して、発掘調査によってその実像を明らかにしたことは、富田城下町の遺跡の認識において重要な価値を有するものである。

しかしこの3年間の調査は、月山西麓にひろがっている城下町遺跡のうち飯梨川河床部分だけについてみてもその10%に満たない面積を調査したにとどまり、城下町遺跡全体からみればまことに九牛の一毛を検索したにすぎない。

この調査結果をもって富田城下町の遺跡の全貌を推測することはもちろん不可能であり、その解明は今後の全面的な調査をまつておこなわれるべきものである。

以下、各項で述べられたことを要約しつつ、調査により判明したことがらを総括してみる。

(1) 文献資料について

堤防等の治水施設の完全でなかった江戸時代には、富田川は度々氾濫をし、その流域に多大の被害をもたらしたことは事実であるが、富田城下町が潰滅したのは、関係資料から寛文6年(1666年)の大洪水であったことにまちがいなく、したがって富田川河床遺跡の下限は寛文6年の時点におかれる。

また寛文6年時点前後の換地帳・屋敷帳等から、少なくとも富田城西方の月山山麓一帯には町割りされた町並みが展開していた事実が判明した。そしてこの城下町は、松江移城により出雲における中枢的位置を失った後も寛文6年に潰滅するまで、なお往時の概形を存し、ある程度の町家が残存しており、周辺農山村との経済交流においてこの地方の一つの経済的中心として機能していたことが推測されるものである。

(2) 遺物について

出土した遺物の中で圧倒的に多いのは陶磁器類であり、昭和40年代にこの遺跡が郷土史家に注意されるようになって以来の採集されたものを含めると膨大な量に達する。

第1年次調査区で出土したものは、堆砂中からの出土が多く伊万里、土師質土器、備前、白磁青花、唐津などであり、古いものも混在しているが、全体的には江戸時代を下るものである。

第2年次調査区では伊万里と唐津が多く、主体は江戸時代を下る(江戸時代初期)ものである。

新宮橋下流の第3年次調査区では、上層では唐津が主体で伊万里が混入し、下層になると土

師質土器、白磁青花、唐津などが出土し、上層と下層で時期を異にする2群が存在することが考えられる。上層の新しい群は第2年次の遺物と共通し、下層の群はそれより若干古い（桃山時代までさかのぼる）ことが考えられる。

また第3年次に調査をおこなった新宮橋地点では、上層は土師質土器、唐津が主体で、下層は備前、土師質土器、白磁青花、白磁が主体であり、上層の遺物は第3年次調査区の下層のそれと類似する。下層はそれより古いことが考えられるが、唐津があまり出土しないことから、桃山時代中期をさかのぼる時期にあたると考えて大きな誤りはないと思われる。

このように、陶磁器類は、層位的に備前・土師質土器・白磁青花・白磁を主体とする群、土師質土器・唐津を主体とする群、唐津・伊万里を主体とする群の3群が考えられ、それぞれ古い順に3時期に分けることができ、江戸時代初期、桃山時代後期、桃山時代中期以前にあたると考えられる。

そのほか、過去10年以上にわたる表面採集品の中には鎌倉時代～室町時代の遺物も相当含まれているが、今度の調査ではそのような遺物はほとんど検出されなかった。このことから富田河床遺跡全体に関してはさらに古く少なくとも室町時代中期までさかのぼる遺構の存在が予想されるものである。

(3) 遺構について

3年間の発掘調査で検出された遺構は、建物跡15、井戸跡15、道路跡5、鍛冶工房跡2、木桶9、その他であった。

これらは保存状態がきわめて良好なものもあるが、寛文6年あるいはそれ以後の洪水等による破壊の爪跡は随所に残っており、特に石組の構造物については、石の欠落した部分があり、またずれたり移動した石も多くみられた。そのほか石が不規則に散乱している部分もあった。

建物跡は多く石垣状の構造をめぐらした長方形の区画をもち、なかには掘立柱の柱根や礎石（根石）を遺存しているものがあって、建物の規模、法量がわかり、城下町の構造を考える上で貴重な資料を提供した。

今度の調査の成果の一つは、第3年次の調査区において町のなかをはしる幹線道と推定される幅約6mの本格的な整備が施された道路跡を発見したことであり、またこれに沿った3間間口の建物跡が数棟検出され、道路を軸にした町並み構成の具体的な資料を得ることができた。しかしこの道路跡は残念なことに約27mしか発掘されておらず、川ぞいに上流南は未調査区であり、下流方面については第2年次に沼池で発掘できなかった区域にかかりさらに堤防敷に入るものと思われる。第1年次、2年次の調査において屋敷区画を示す長方形の石組の辺がほぼ平行してはしっていたが、これらの屋敷はすべてこの道路にそって屋敷割されていたことが推定されるものである。

また第2年次の調査区で、鍛冶工房跡と推定される遺構が発見された。木材、竹、石などを用いて長方形の区画をつくり、内部に石臼の残渣や木桶をおく小規模な構造で、区画内や近くに多量の鉄滓が散布していること、使用磨滅の甚しい大形砥石が検出されたこと、それに金属分析の結果鉄滓のTiO₂の含有量が少ないとなどから小鍛冶工房跡と推定されるものである。また第3年次調査区では、3間間口の屋敷地内で、鉄滓を混ぜる堅く焼けしまった土質の部分があり、鍛冶屋の作業場跡と判断した。この部分は、約30m²の範囲で、強熱された床土が金属的硬度をもち、約20cmの厚さに複層構造になっていた。隣接した同じ3間間口の屋敷地内にも本質層、焼土がありやはり鍛冶屋と判断された。

川越市喜多院所蔵の狩野吉信筆といわれる重要文化財の「紙本著色職人尽絵」には鍛冶屋の図があるが、その家構えの感じは他との比較において小さな部類に入り、当時の鍛冶屋が一般的に簡素な構造であったことがうかがわれる。また前記の寛文8年広瀬町屋敷帳には鍛冶町(47軒)に18軒の鍛冶屋があり、最小の3間間口の屋敷が多いことが注意されたが、これらのことを利用して参考にして考えると、この区域は鍛冶町であった可能性がある。これらの点を総合して、これまで発掘した区域は大部分は城下町中の町家区域に当ると考えられる。

遺構の層位的構成については、第1年次、2年次の調査ではわずかに建物区画の石組みの切り合いなどからその事実が認められていたにすぎなかったが、第3年次調査では、下層遺構についても調査をおこなった。その結果、第一層の道路跡や建物跡の下に第二層の遺構として道路跡や建物跡が確認された。なお新宮橋地点の調査では2層以上の層位が確かめられている。

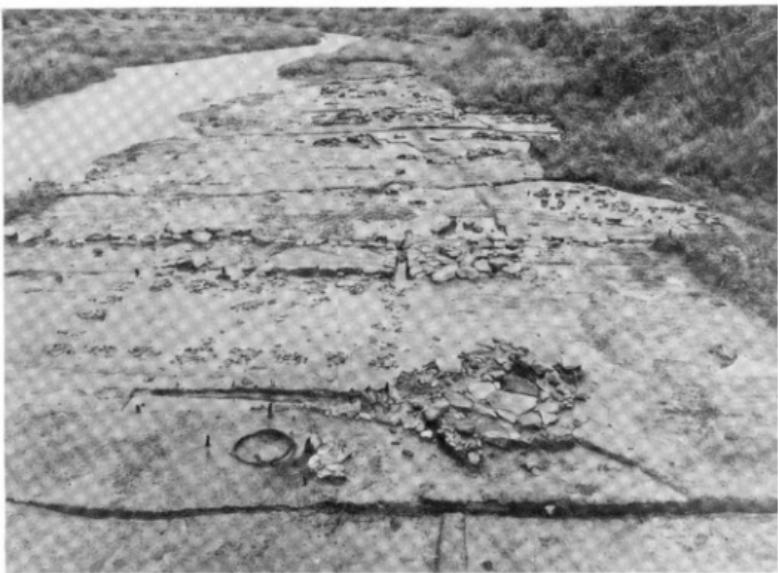
これらの各層から出土する遺物について陶磁器類は時期的に異なる3群(組合せ)が確かめられている。品種の組合せから今度の調査区の上層遺構は江戸時代初期に比定されるもので、寛文6年の洪水の事実と符合し、下層は桃山時代までさかのぼることが考えられるにいたった。

今度の3年間の発掘調査は、以上のように城下町としての集落の様相、住居の配置、型式あるいは遺跡の層位的構造の確認、下層遺構の検出など部分的にはいえ一応の成果をあげることができた。しかし発掘面積が少ないため町割りの規模など面的拡がりについては確めることができなかった。これらのことについては、将来の発掘調査をまって一般的実態を究明しなければならない。

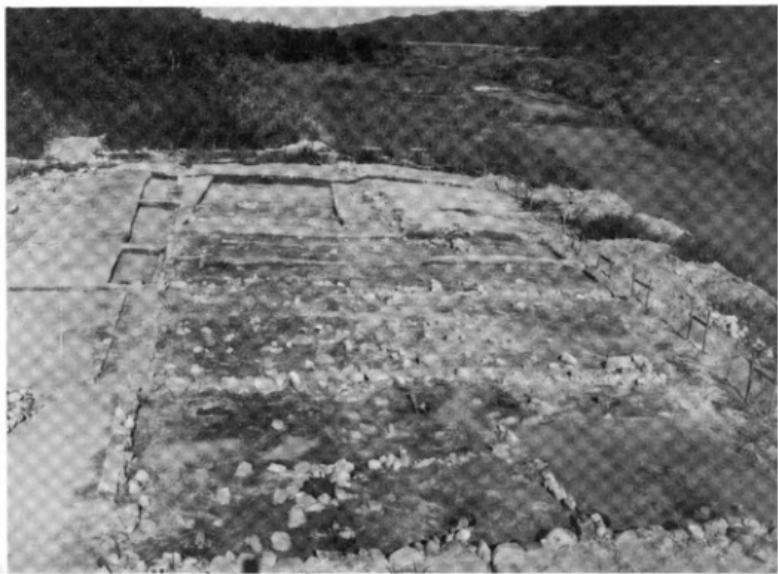
そのほか発見の文献的資料の検索もさらに推進しなければならない事項であり、また宮田城下町の実態解明に關係する周辺地域等における関連資料の調査も大方の協力を得て綿密におこなわれるべき目標である。

(山本 清)

PL. 1



50年度調査区全景（川下から）



51年度調査区全景（川上から）



建物跡 SB006 (土手側から)



建物跡 SB012 (土手側から)

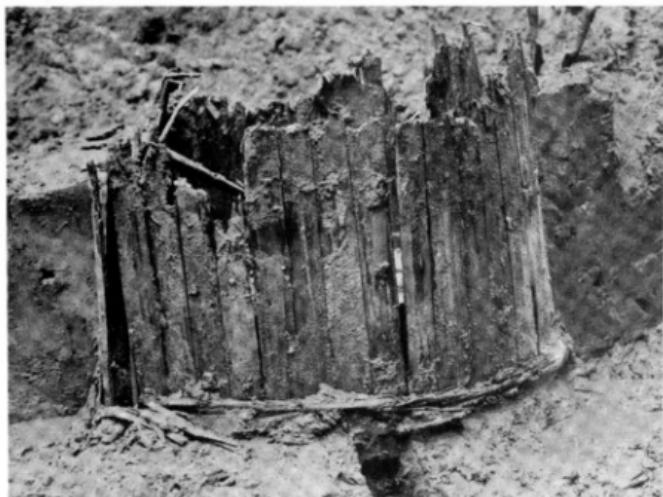
PL. 3



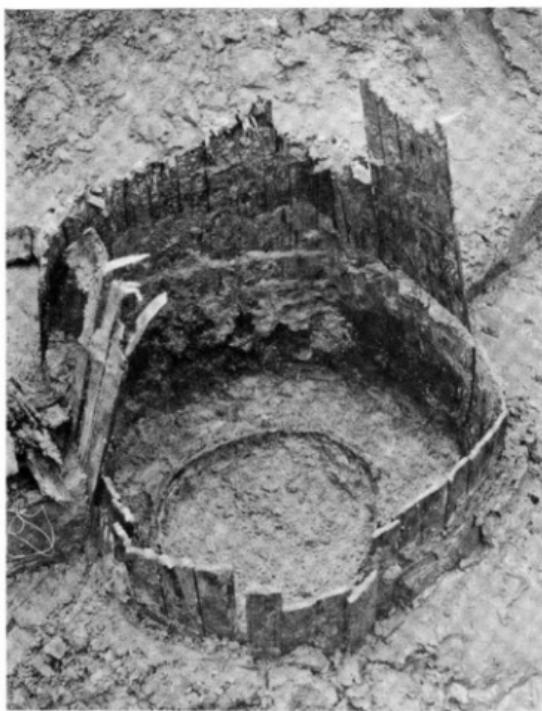
井戸跡 SEO10 (土手側から)



井戸跡 SEO14 (川上から)

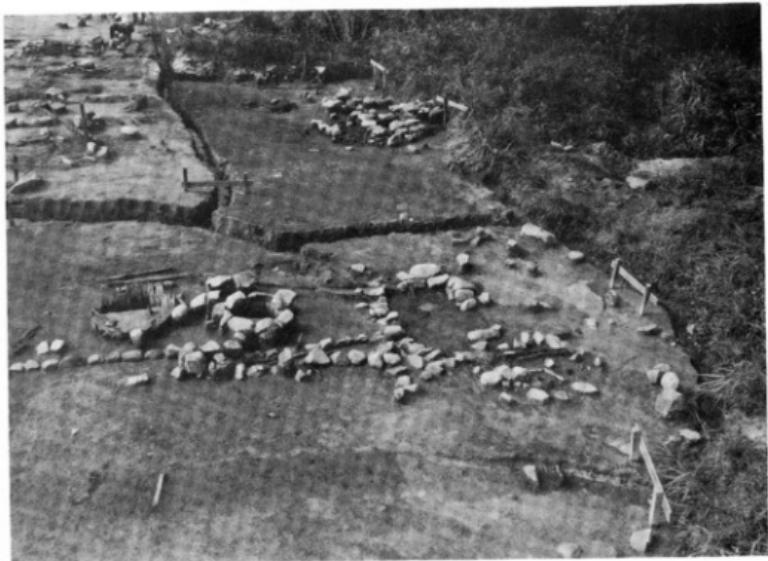


井戸跡 SEO15 底部外側

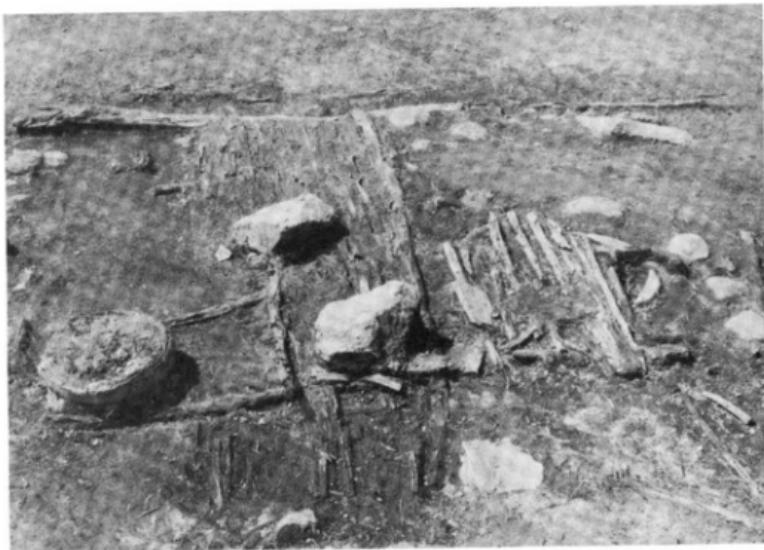


井戸跡 SEO15 底部内側

P.L. 5



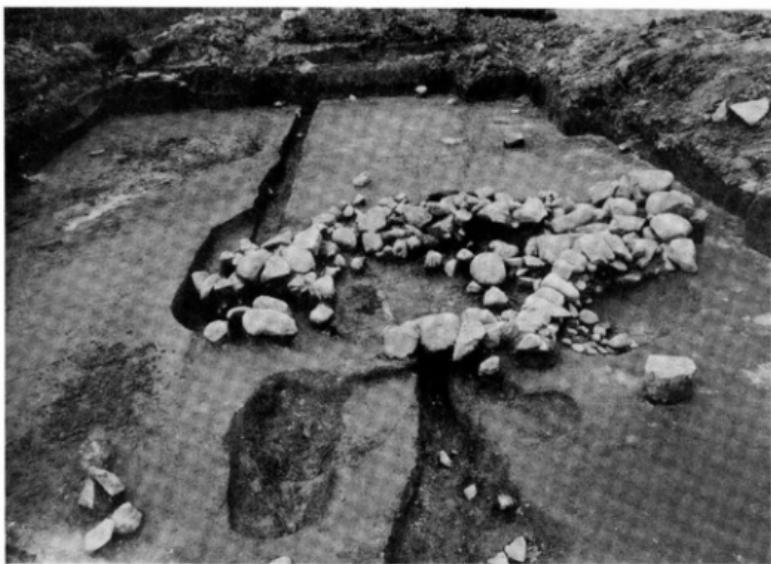
工房跡状遺構 SX004



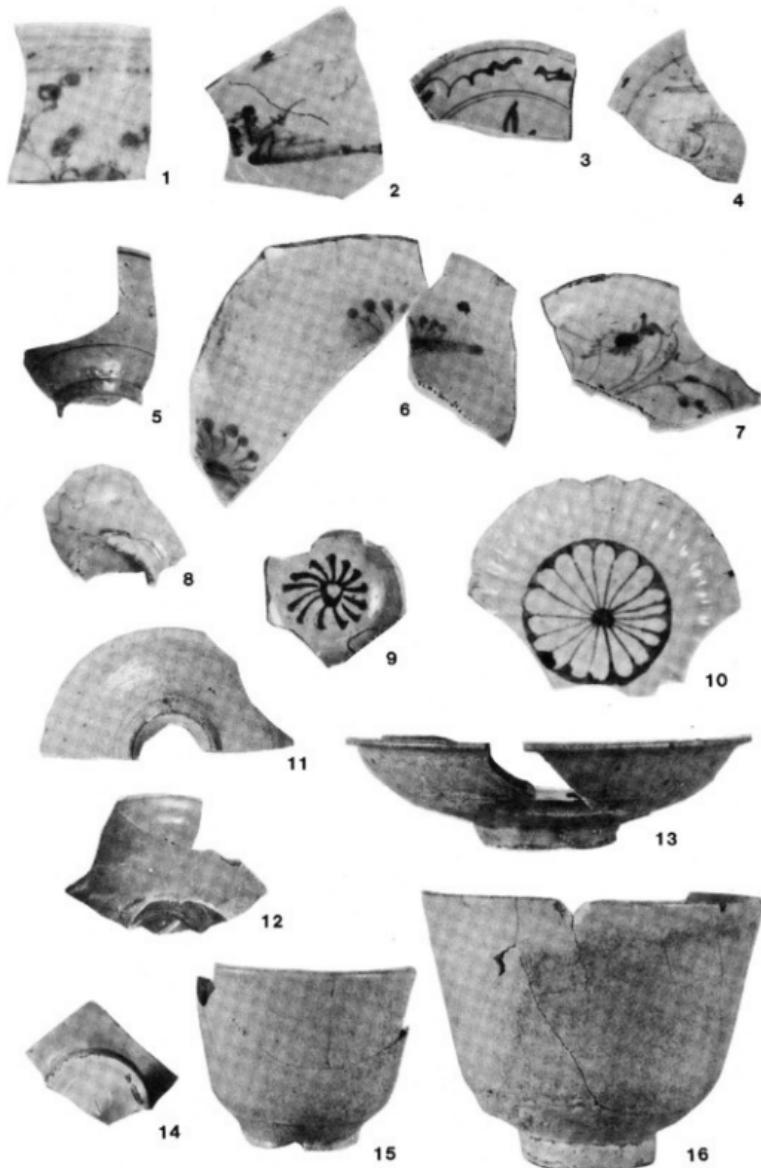
工房跡状遺構 SX005

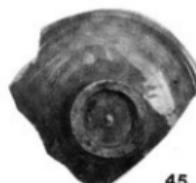
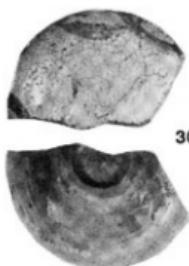
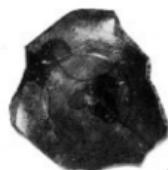


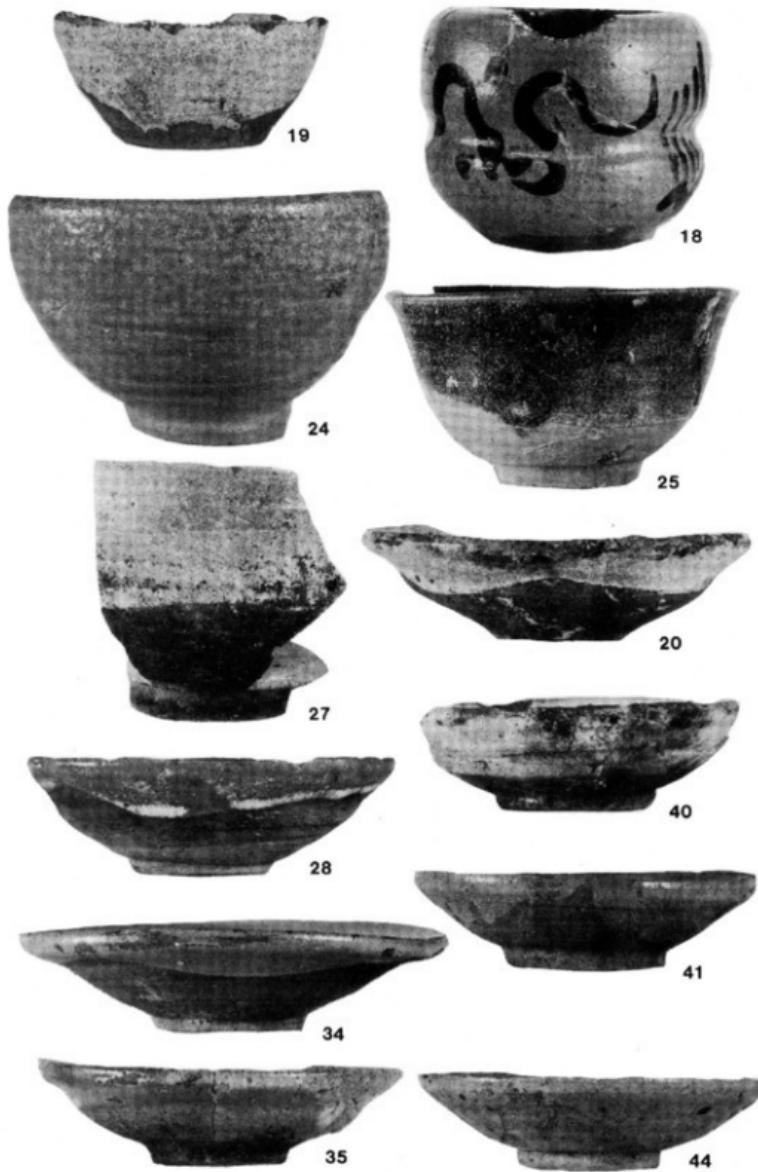
道路跡 SS003 (川下から)



池状遺構 SX022 (川上から)

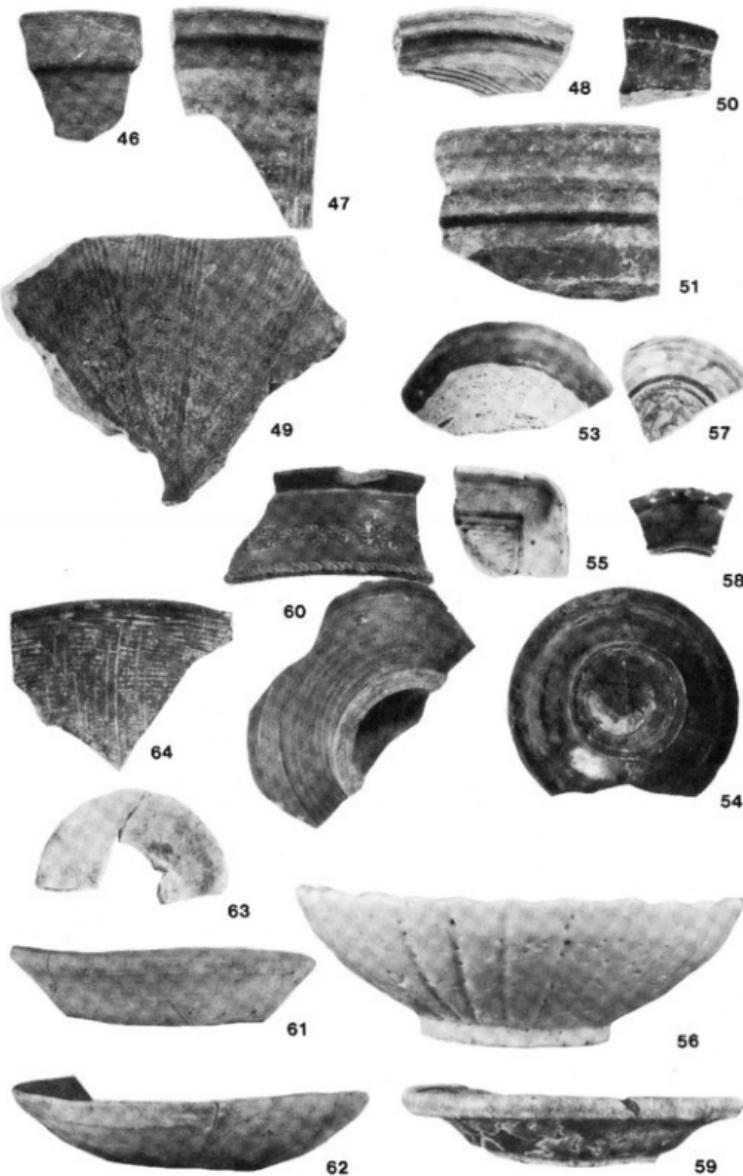


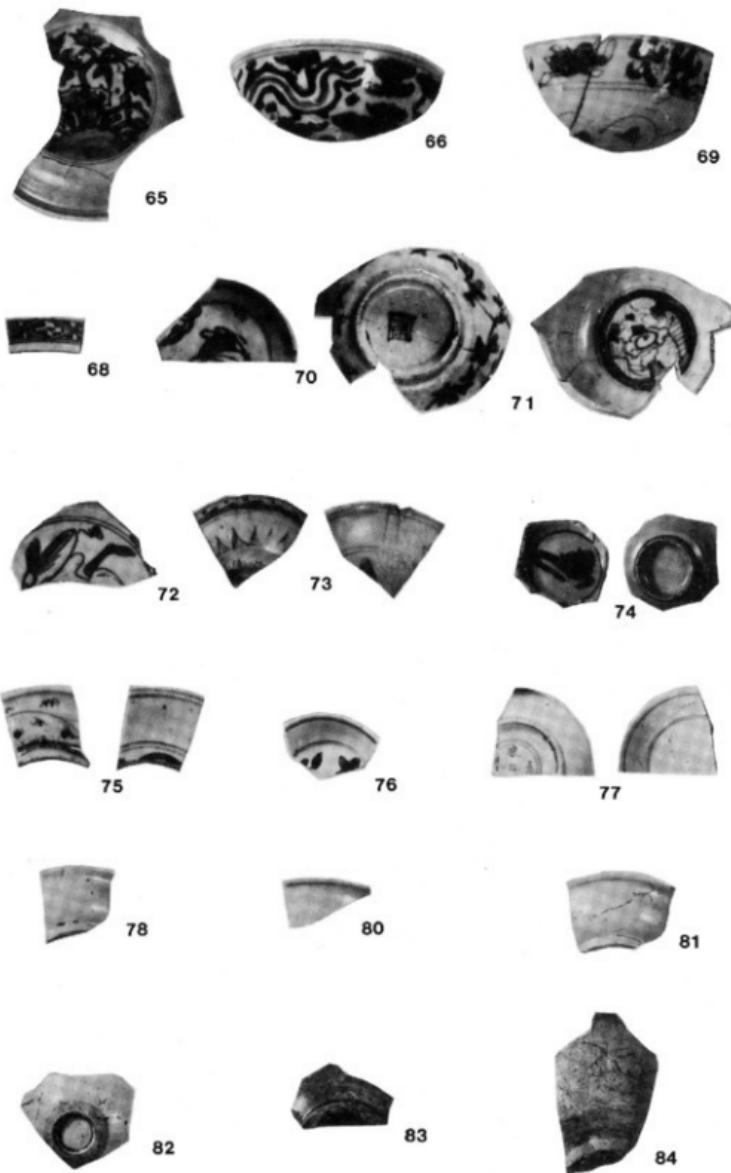




PL. 10 出土遺物 (4)

備前、美濃、瀬戸







85



86



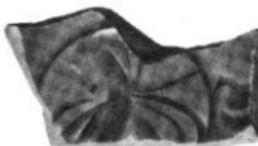
88



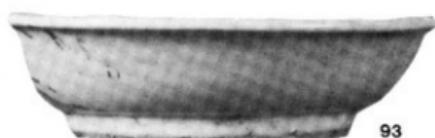
87



89



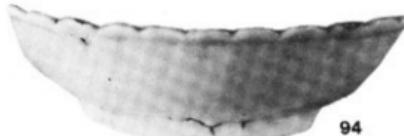
92



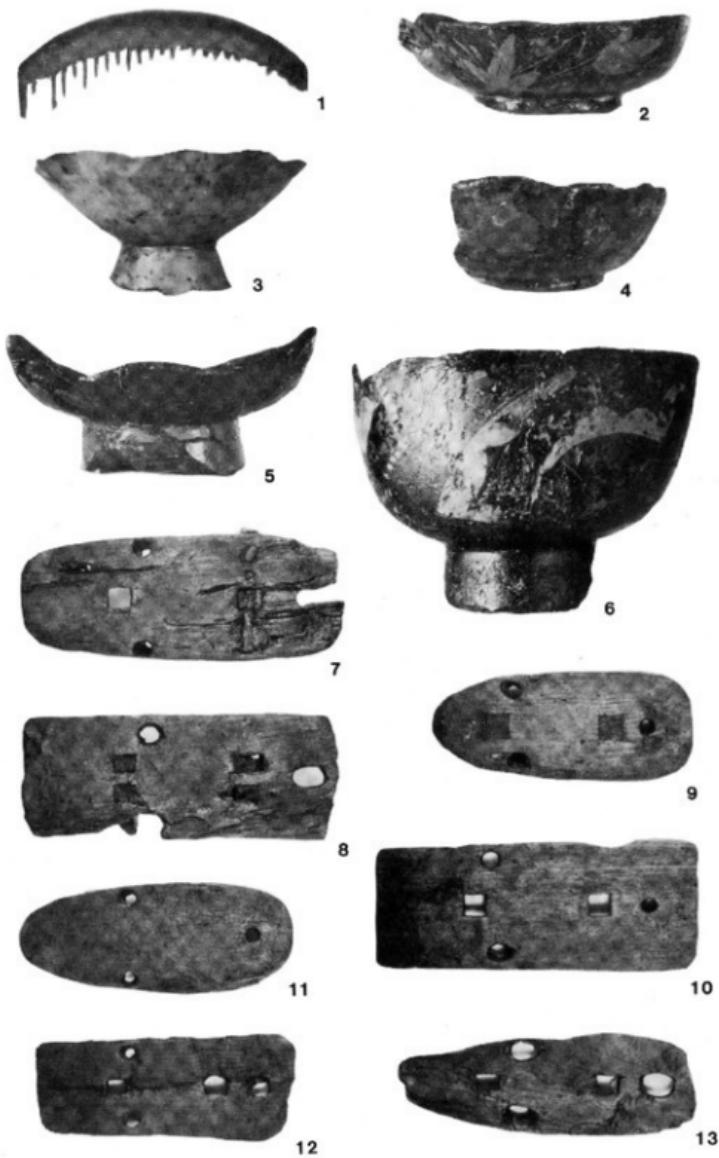
93

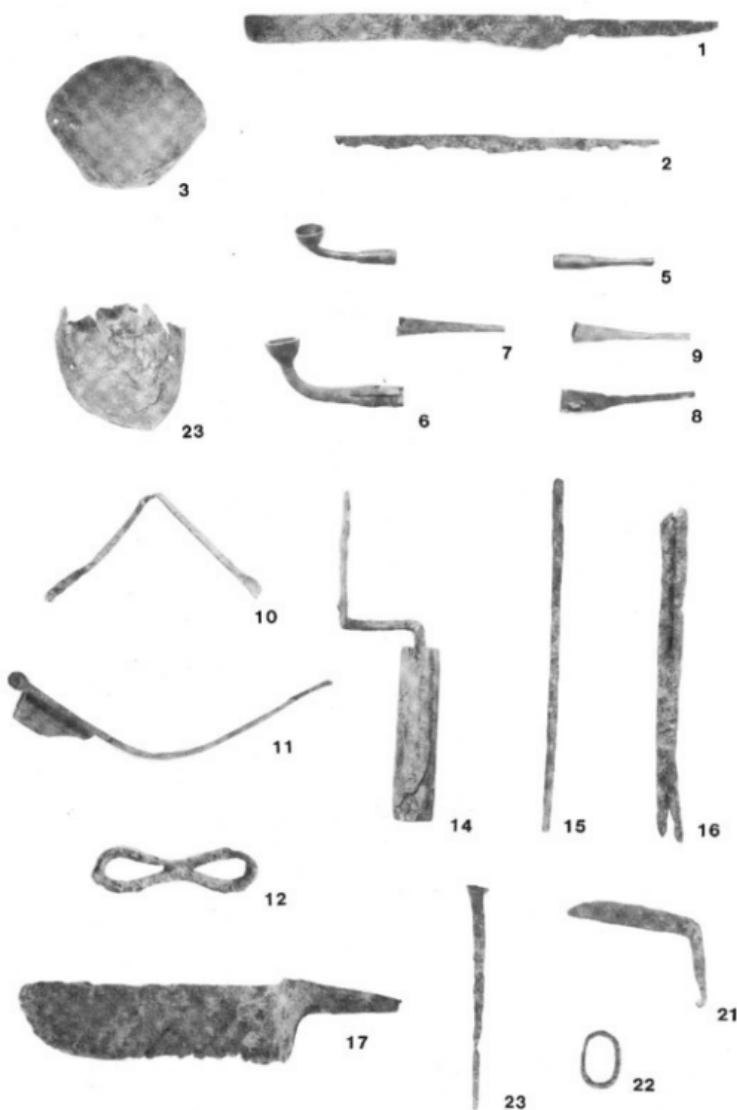


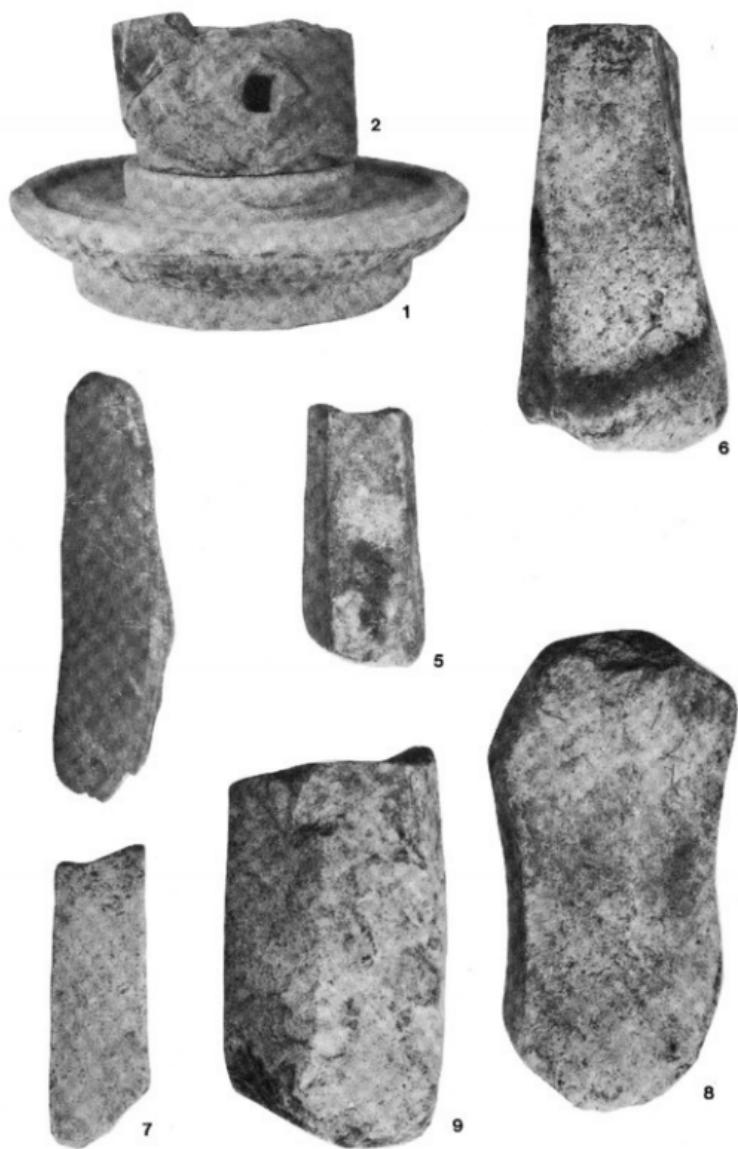
102



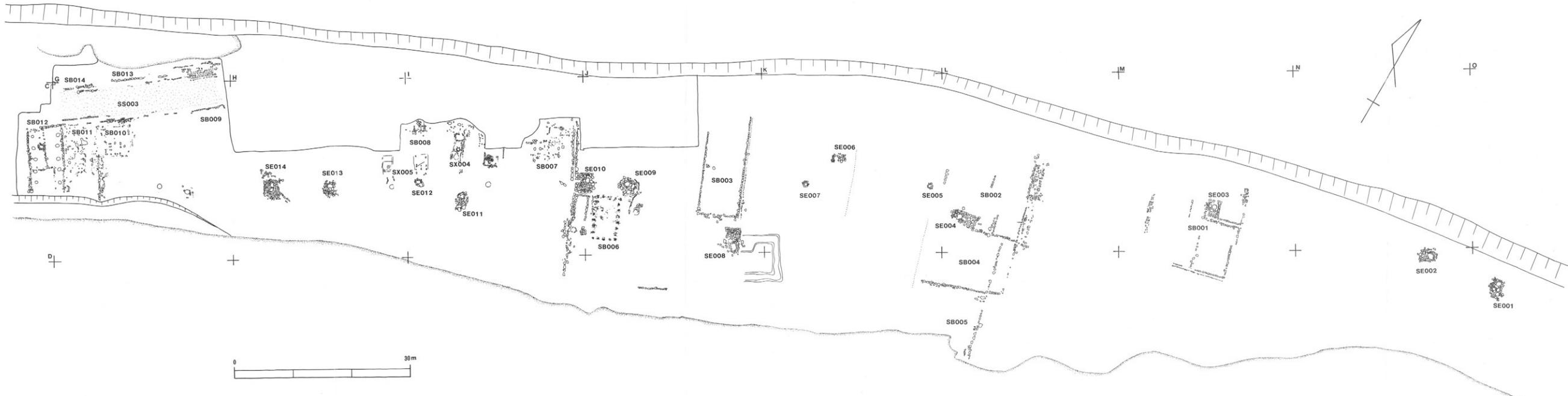
94



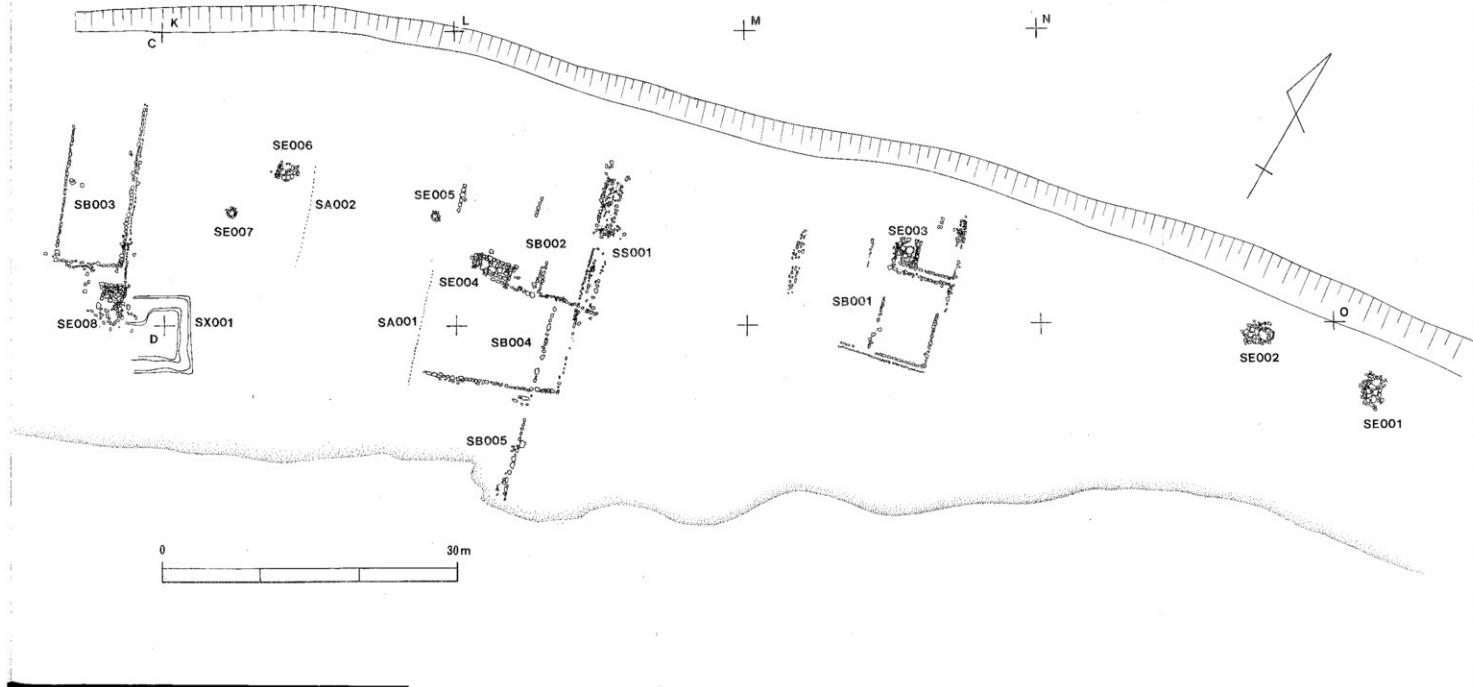




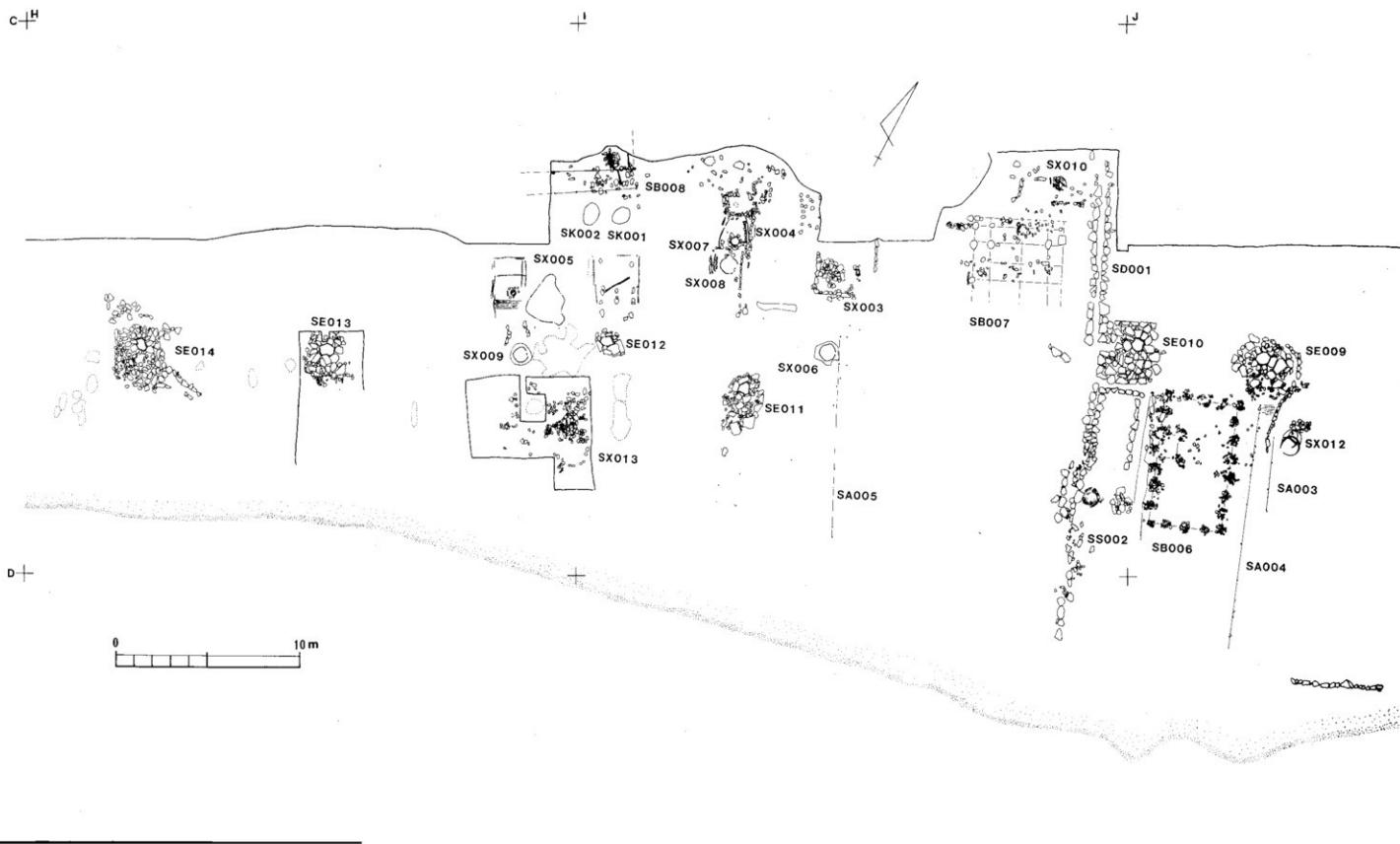
第Ⅰ図 調査区全体図



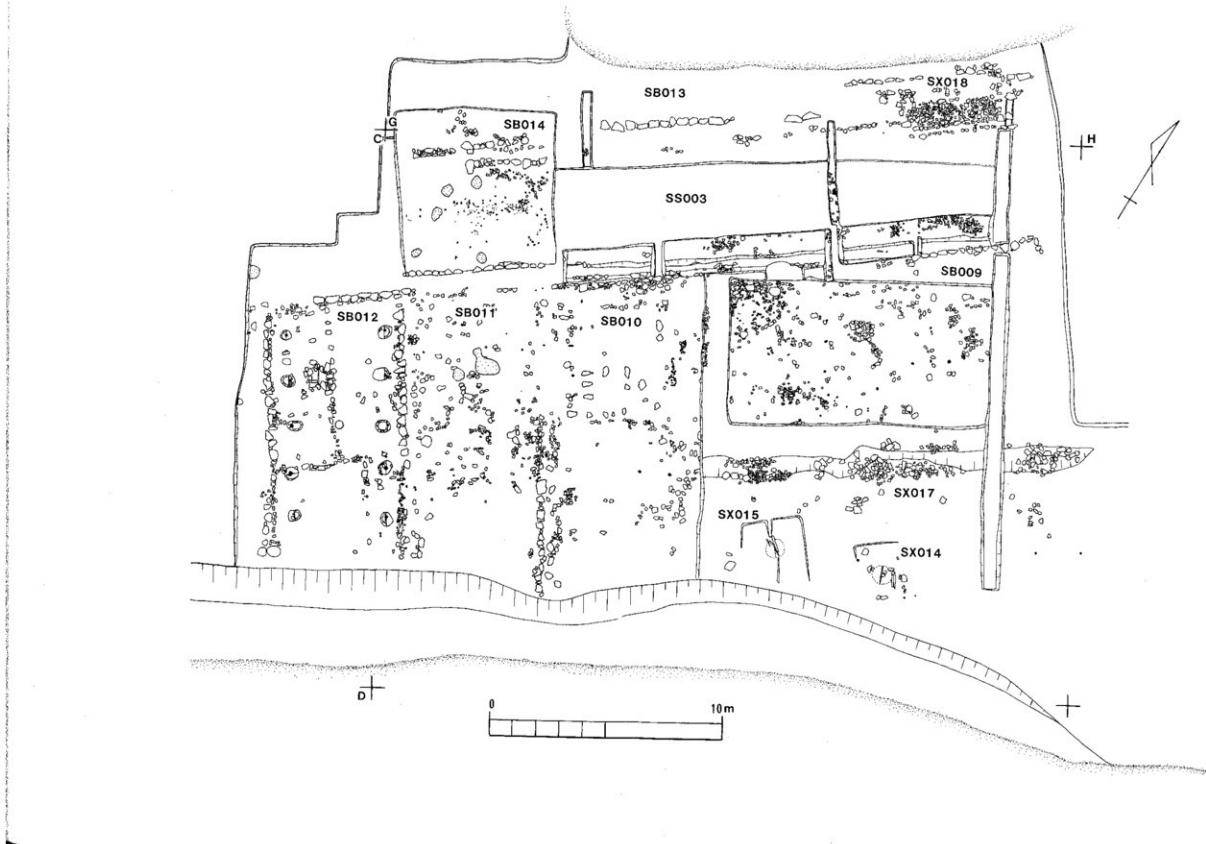
第II図 49年度調査区全体図



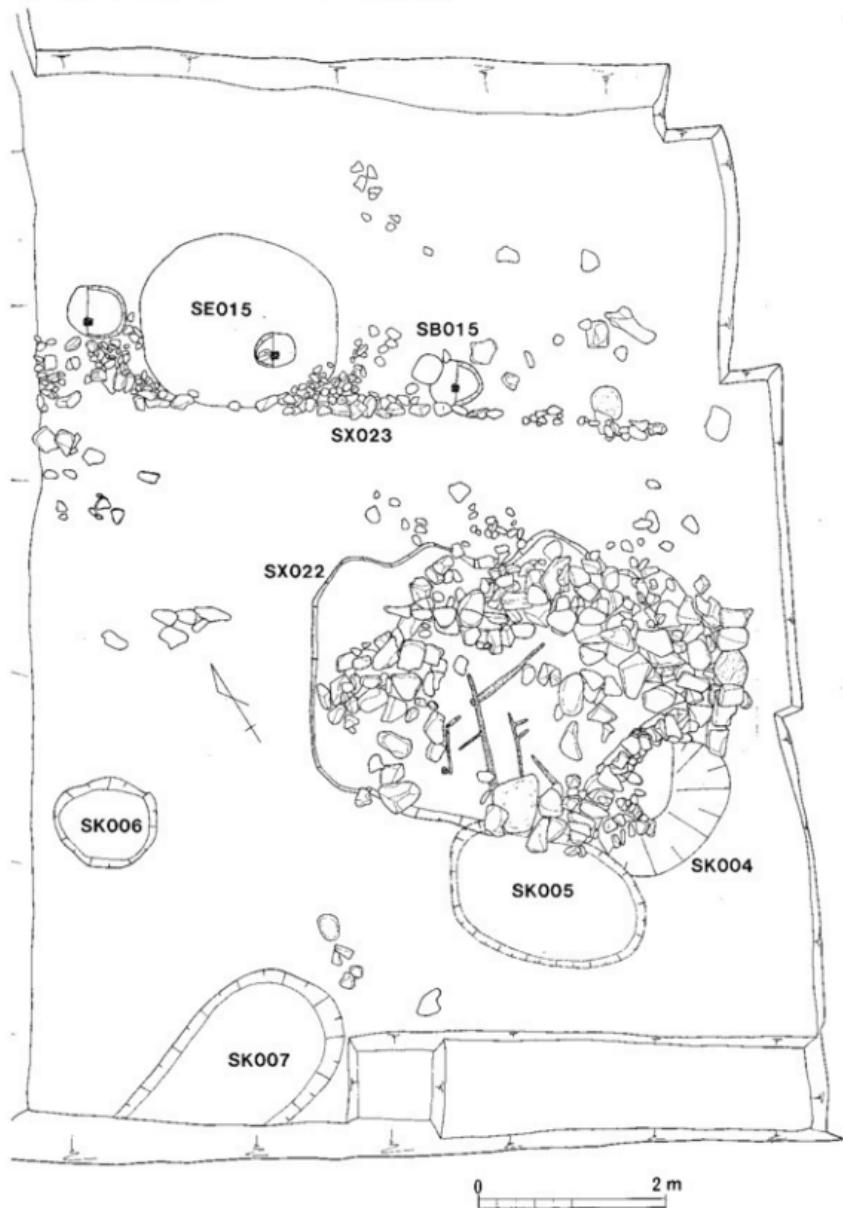
第III図 50年度調査区全体図



第IV図 51年度調査区全体図

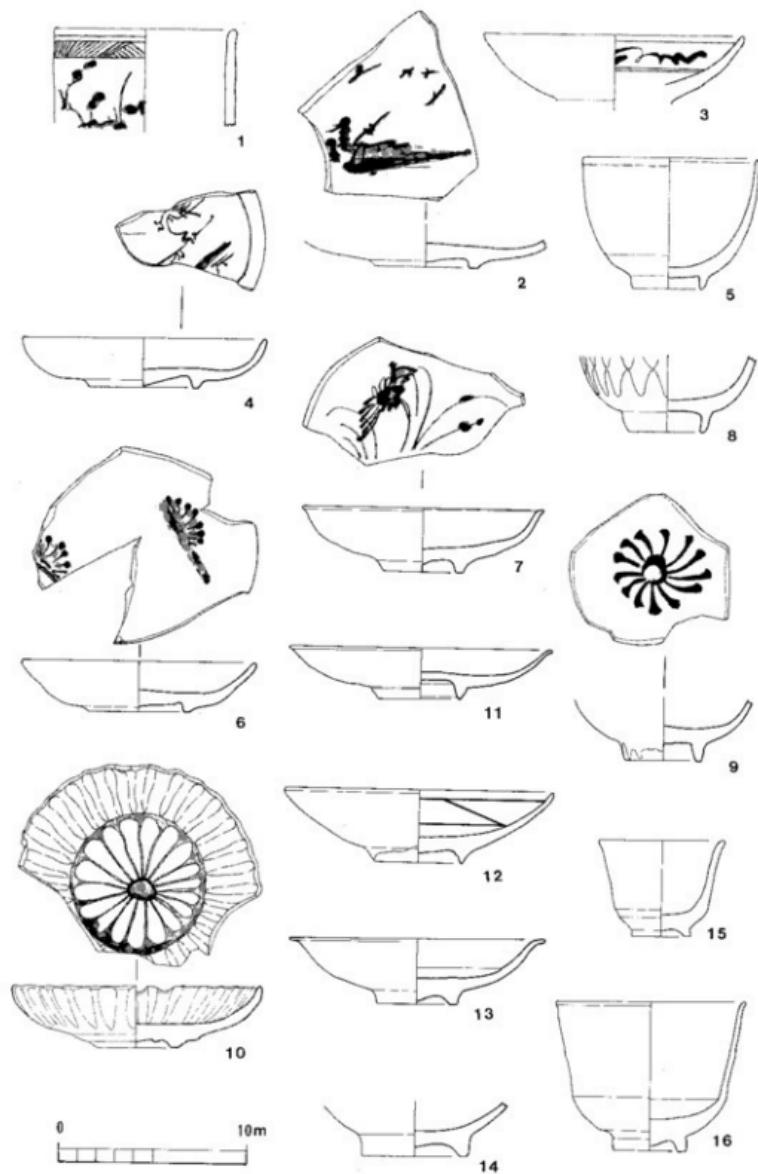


第V図 新宮橋地点P2グリッド下層遺構



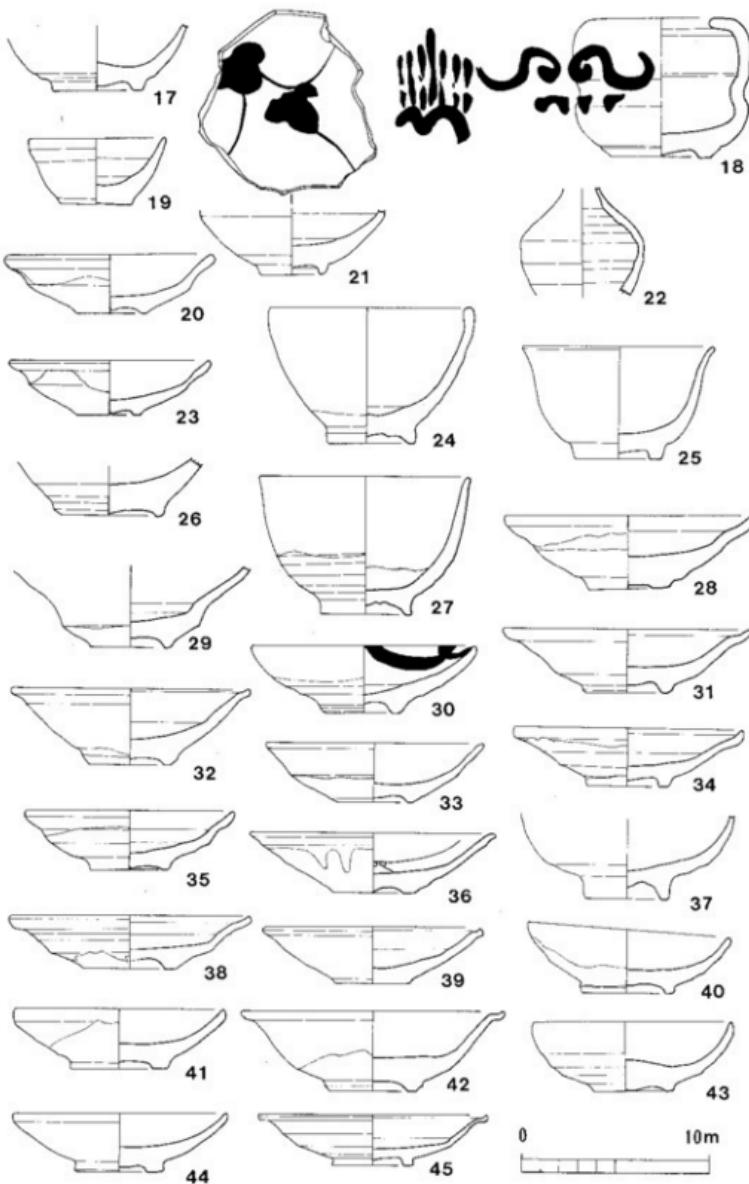
第VI図 出土遺物実測図 (1)

伊万里



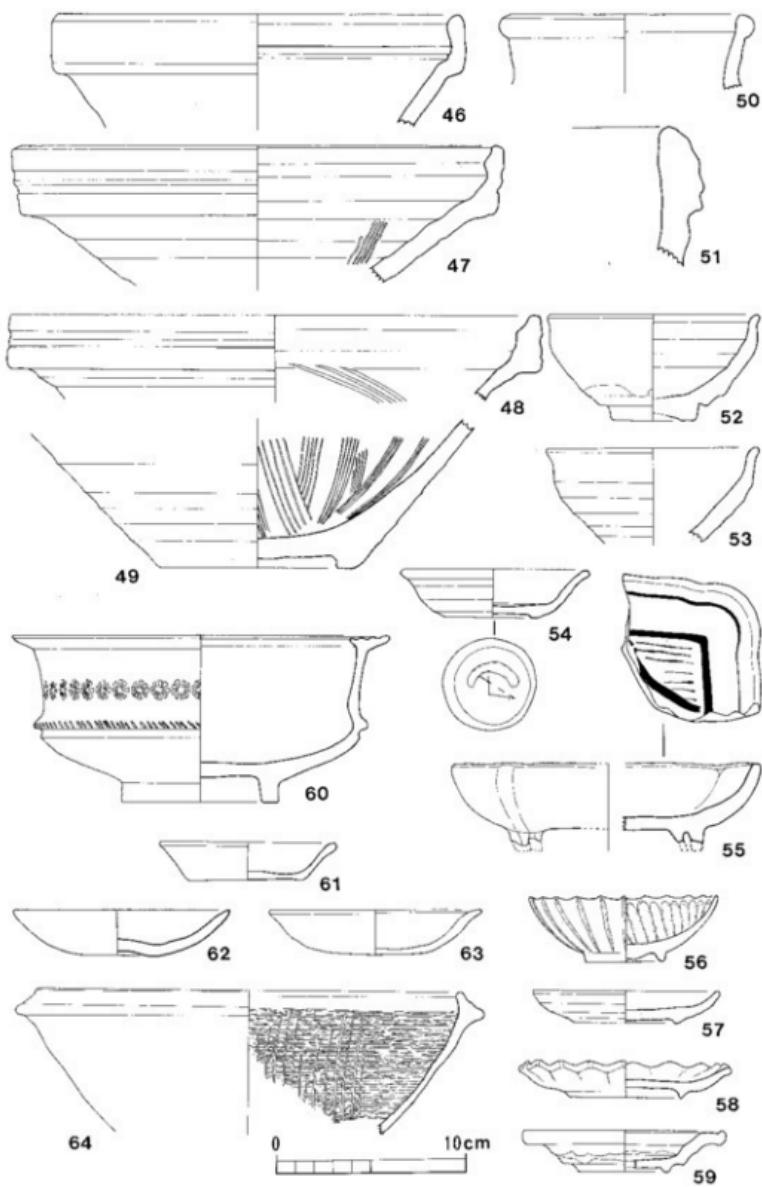
第VII図 出土遺物実測図 (2)

唐 津



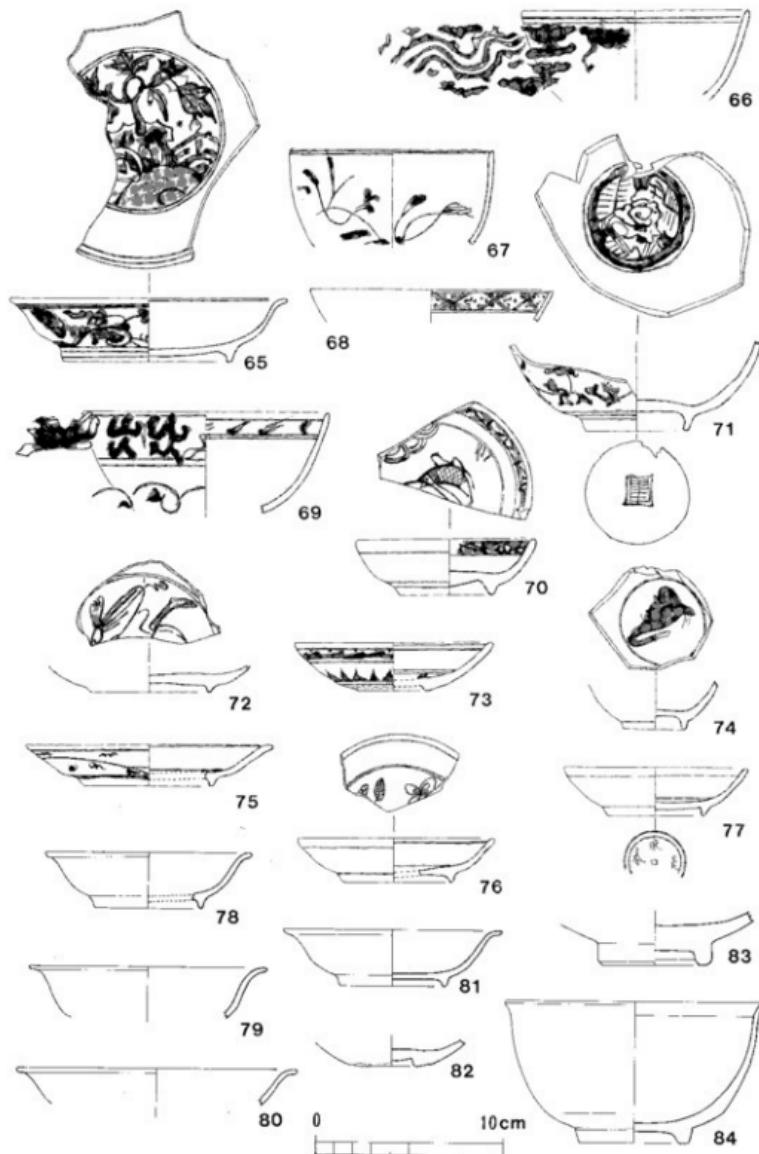
第3図 出土遺物実測図（3）

備前、美濃、瀬戸、その他



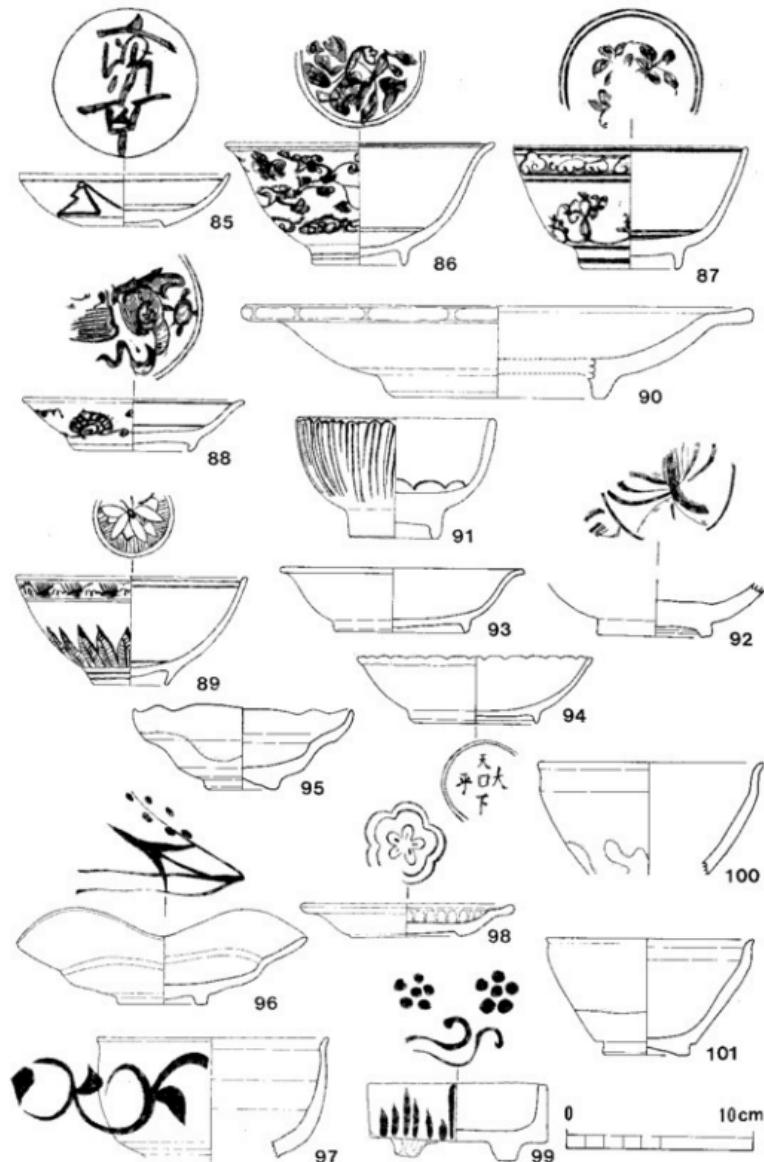
第IX図 出土遺物実測図 (4)

中国陶磁



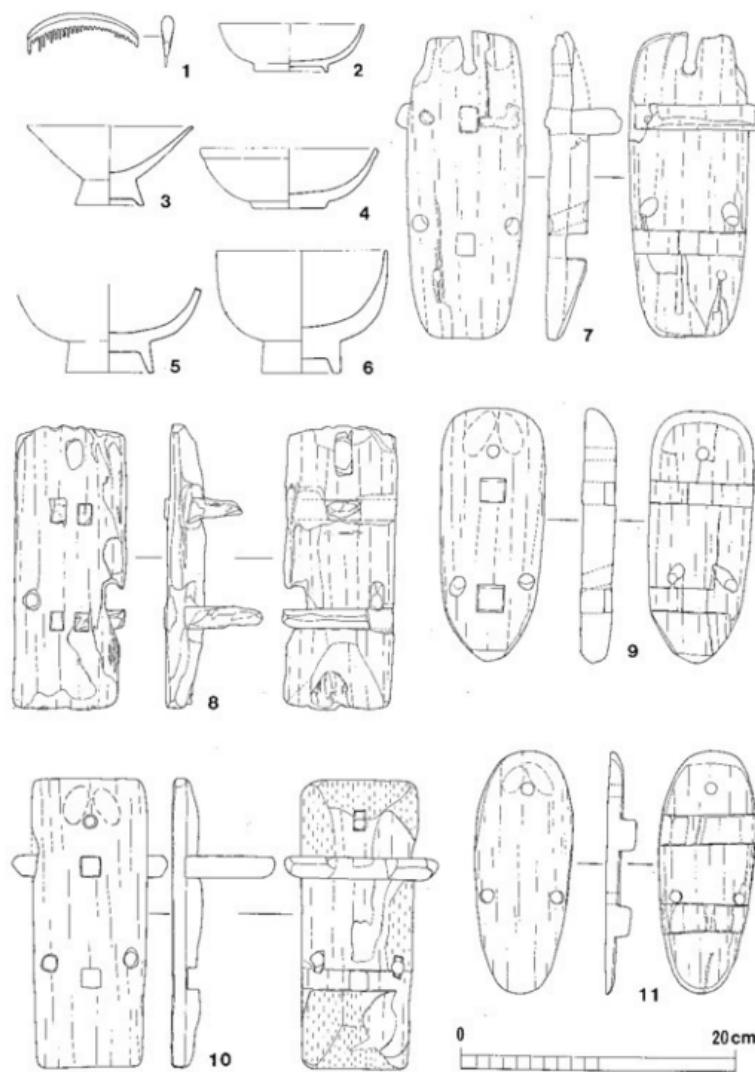
第X図 出土遺物実測図（5）

流砂の陶磁



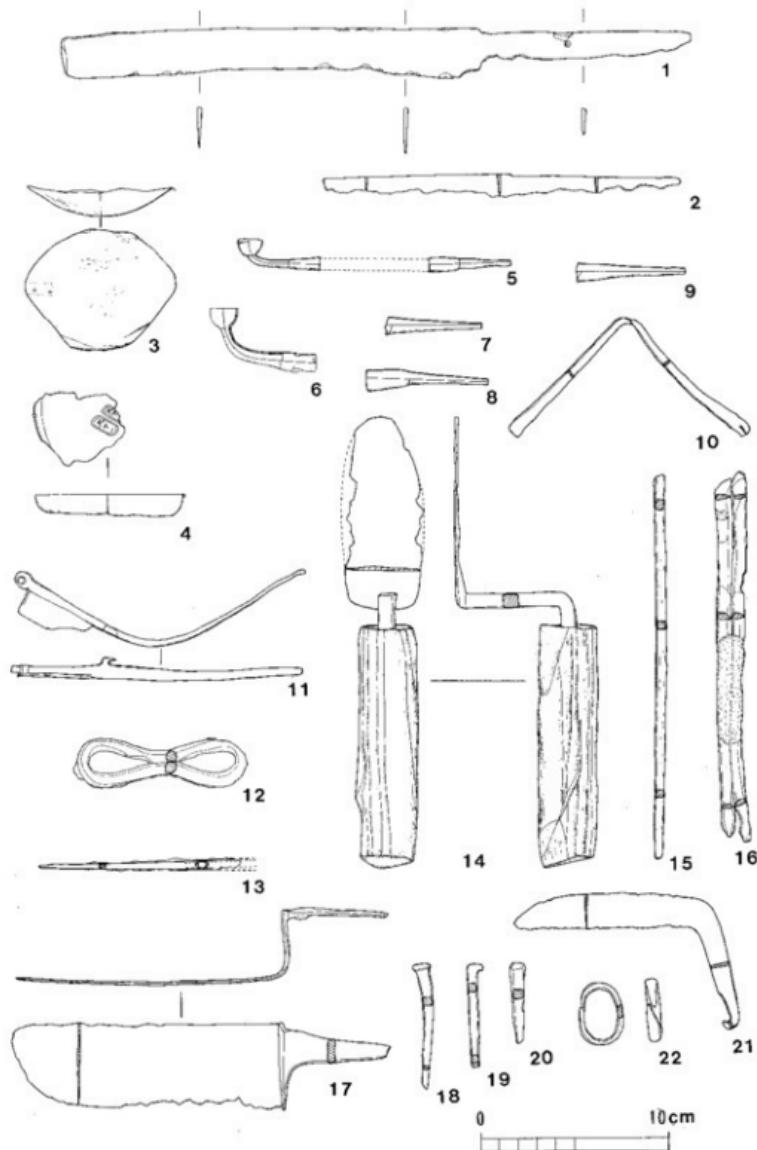
第XII図 出土遺物実測図 (6)

漆器、木製品



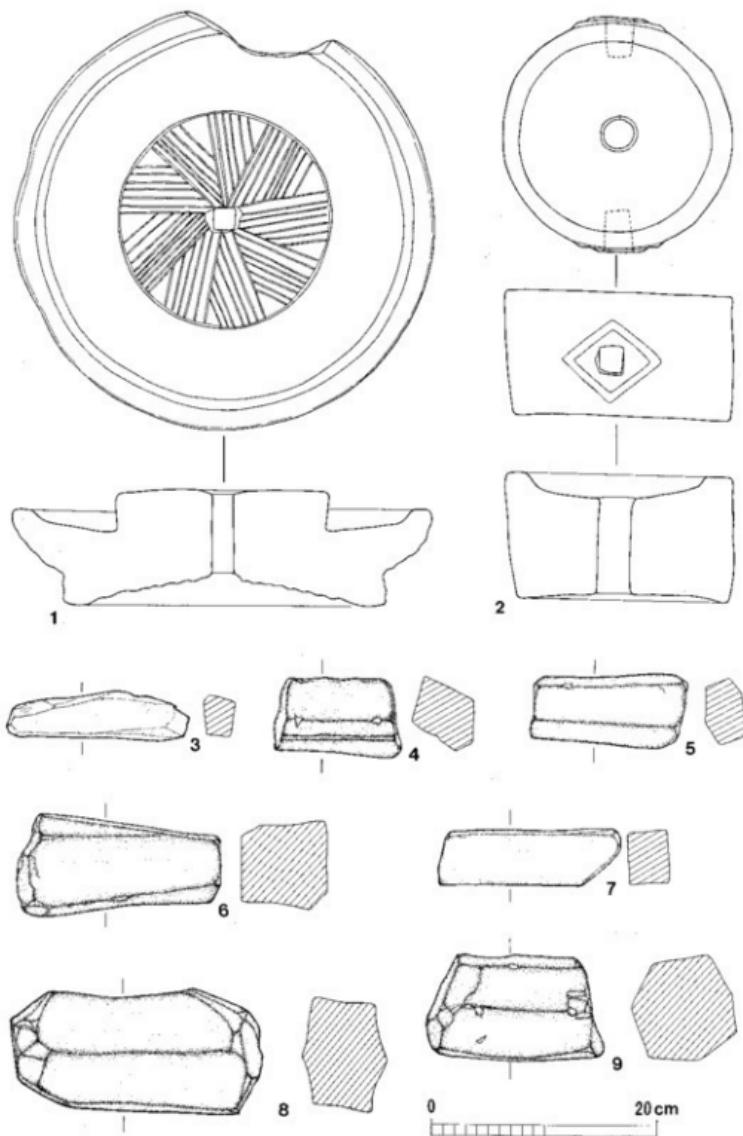
第3図 出土遺物実測図 (7)

金属製品



第8図 出土遺物実測図 (8)

石製品



富田川河床邊跡

発掘調査報告書

昭和52年3月30日

発行 島根県能登郡大瀬町
広瀬町教育委員会
富田川河床邊跡調査会
印刷 富田市富田町
株式会社報光社